



# Anchor

アンカー



ほふられた小羊こそは、  
力と知恵と勢いと、誉れと、栄光と讚美とを  
受けるにふさわしい！

第9号

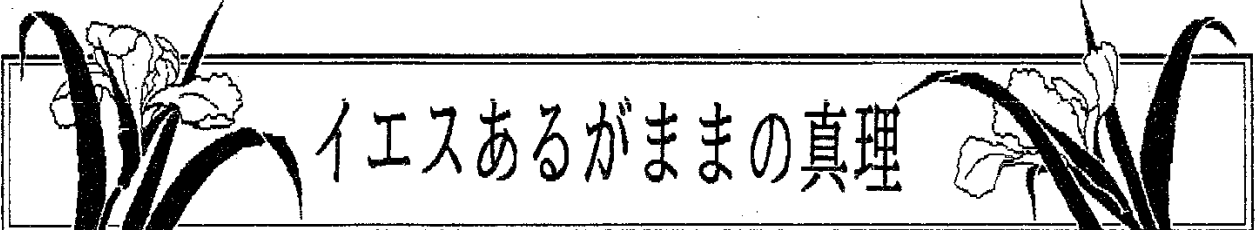
## ☆ 目次 ☆

イエスあるがままの真理．．．．．	1
しかし、暖かな愛、喜び、平和はなかった．．．．．	18
ダニエル11：40～45の研究	
激動の嵐—最後の戦い．．．．．	32
宗教パワーと世界政治．．．．．	39

### ◎◎◎◎◎アンカーの目的◎◎◎◎◎

我々は次のことを信じてアンカーを出版している。

1. 我々SDAの働きと使命は三天使の使命である。(6T384, 2SM142)
2. 第三天使の使命は人々を再臨の栄光の前に立ち得る特別な備えをさせるものである。(9T98, 大下140)
3. 第三天使の使命は人々の心を至聖所に向ける。そこにおいて信者は最後の、特別なあがないを受ける。(初文414, 5, 7)
4. 我々は神のもくろまれたこの特別な祝福、特別な体験を拒み続けてきた。特に1888年以来。(RH8/26, 1890)
5. ダニエル8：14の聖句は再臨信仰の土台であり、御業の完成はこの聖句の正しい理解にかかっている。(生き残る人々422, EV221, 5T575)
6. エレン・G・ホワイトは聖書の預言者と同様の靈感が与えられた預言者である。(1SM36)
7. 最後の時代の嵐に押し流されないようにさせるアンカー(錨)は、三重の使命、聖所、安息日、人の性質、イエスの証(預言の霊)等である。(初文417, 1T300)
8. アンカーはリレーの最終走者の意味がる。この世代は福音の働きが信者の中に、外の世界に完成する最後の時代である。不信仰によって、140年以上も時が延ばされ、イエスの十字架の苦しみを増している。(大下182, 教育328)。信仰による義認の体験によって、再臨を早めることをキリストは待っておられる。再臨と御業完成をこれほど遅らせているのが我々神の民であるとするならば、我々の今日の義務は何か、約束のものを受ける条件は何なのか研究し、共に備えたいと思う。



# イエスあるがままの真理

真理は啓示されるものである

「そのときイエスは声をあげて言われた、「天地の主なる父よ。あなたをほめたたえます。これらの事を知恵のある者や賢い者に隠して、幼な子にあらわしてくださいました。父よ、これはまことにみこころにかなった事でした。すべての事は父からわたしに任せられています。そして、子を知る者は父のほかにはなく、父を知る者は、子と、父をあらわそうとして子が選んだ者とのほかに、だれもありません」  
マタイ 11：25～27。

しかし、聖書に書いてあるとおおり、「目がまだ見ず、耳がまだ聞かず、人の心に思い浮びもしなかつたことを、神は、ご自分を愛する者たちのために備えられた」のである。そして、それを神は、御霊によってわたしたちに啓示して下さったのである。御霊はすべてのものをきわめ、神の深みまでもきわめるからである。いったい、人間の思いは、その内にある人間の霊以外に、だれが知っていようか。それと同じように神の思いも、神の御霊以外には、知るものはない。ところが、わたしたちが受けたのは、この世の霊ではなく、神からの霊である。それによって、神から賜わった恵みを悟るためである。1コリント 2：9～12。

「すると、イエスは彼にむかって言われた、「バルヨナ・シモン、あなたはさいわいである。あなたにこの事をあらわしたのは、血肉ではなく、天にいますわたしの父である。」マタイ 16：17。

人間の知性は真理を発見できないということを認めることは、誇り高い人間にとって最も屈辱的なことである。この人間の脳細胞で、真理を発見することは全く不可能である。もし人が真理を持ち、真理を理解し、また真理のうちにあるとするならば、その人こそ、そのことで自分には何の功績もないことを最も良く知っているはずである。真理は天から啓示されるものであり、地上で発見されるものではない。真理は神の所有物である。神の無限の愛と憐れみのうちに、人間が真理を仰ぐことをお許しになるのである。神から来るものだけが、神に導くのである。

イエスは真理である

「イエスは彼に言われた、『わたしは道であり、真理であり、命である。だれでも

わたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない』ヨハネ14：6。

神は、その完全な表現を与えることによってこの世に真理を啓示して下さった。「そして言は肉体となり、わたしたちのうちに宿った。わたしたちはその栄光を見た。それは父のひとり子としての栄光であって、めぐみとまこととに満ちていた」ヨハネ1：14。

彼のうちに、幾らかの真理が隠されているとか、ほとんどの真理が隠されているとかではなくて、真理のすべてのすべてが隠されているのである。「知恵と知識のすべての宝」である。(コロサイ2：3)。

「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は初めに神と共にあった。すべてのものは、これによってできた。できたもののうち、一つとしてこれによらないものはなかった。この言に命があった。そしてこの命は人の光であった。光はやみの中に輝いている。そして、やみはこれに勝たなかった」ヨハネ1：1～5。

イエスにあるがままの真理は、あてずっぽうのものではない。絶対に確かなものである。彼こそ堅固な岩なのである。

### イエスは神を啓示された

「キリストにこそ、満ちみちているいっさいの神の徳が表現されており...」コロサイ2：9。

それは彼が神であられるからである。彼はみ子なる神である。父なる神について知るべきすべてのことは、イエス・キリストに啓示されたのである。救い主は父に向かって言われた：

「わたしは、あなたが世から選んでわたしに賜った人々に、み名をあらわしました。彼らはあなたのものでありましたが、わたしに下さいました。そして、彼らはあなたの言葉を守りました」ヨハネ17：6。

「主は彼の前を過ぎて宣べられた。『主、主、あわれみあり、恵みあり、怒ることおそく、いつくしみと、まこととの豊かなる神』」出エジプト34：6。

イエスを他にして神を知るすべはないのである。神を知る者はキリストを知らなければならぬ。さもなければ、彼らは哲学という暗黒につまづき、むなしい欺瞞に陥ってしまう。神の言葉といわれている彼を知る唯一の方法は、靈感によって、書かれたことを受け取ることである。

「医事伝道者がまず最初にしなければならないことは、神についての正しい概念をつかむことである。それは人間自身の判断に基づいたものでなく、神の言葉と、キリストの品性と生涯を絶えず学ぶことに基づいていなければならない」MM91。

イエスは、人間は神にあってどんなものになり得るかということの啓示である

「生ける父がわたしをつかわされ、また、わたしが父によって生きているように、わたしを食べる者もわたしによって生きるであろう」ヨハネ6：57。

「よくよくあなたがたに言うておく。わたしを信じる者は、またわたしのしているわざをするであろう。そればかりか、もっと大きいわざをするであろう。わたしが父のみもとに行くからである。」ヨハネ14：12。

「あなたがたは、実に、そうするようにと召されたのである。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、御足の跡を踏み従うようにと、模範を残されたのである。キリストは罪を犯さず、その口には偽りがなかった」Iペテロ2：21、22。

地上におけるイエスは、神のみ子であられたばかりではない。彼は人の子でもあられたのである。神であり、人間であられた。神の側では、神の子であり、人間の側では、女の末、ダビデの子、マリヤの子であった。

「このように、子たちは血と肉とに共にあずかっているので、イエスもまた同様に、それらをそなえておられる。それは、死の力を持つ者、すなわち悪魔を、ご自分の死によって滅ぼし」「そこで、イエスは、神のみまえにあわれみ深い忠実な大祭司となって、民の罪をあがなうために、あらゆる点において兄弟たちと同じようにならねばならなかった」ヘブル2：14、17。

このイエスの人性は罪を犯されなかったし、その口には偽りがなかった。「我々は、キリストの完全な罪なき人性について疑惑を抱いてはならない」5BC1131。彼がアブラハムの子孫であったことが確かであったように、我々は、彼の人性がもともと義であったのではない事を知るであろう。では、なぜ彼に、誰も罪ありとすることができなかつたのであろうか？

「...父がわたしにおり、また、わたしが父におる」のである。(ヨハネ10：38)。

「よくよくあなたがたに言うておく。わたしを信じる者は、またわたしのしているわざをするであろう。そればかりか、もっと大きいわざをするであろう。わたしが父のみもとに行くからである」ヨハネ14：10、11。

「わたしは、自分からは何事もすることができない。ただ聞くままにさばくのである。そして、わたしのこのさばきは正しい。それは、わたし自身の考えではなく、わたしをつかわされたかたの、み旨を求めているからである」「もし、わたしが自分自身についてあかしをするならば、わたしのあかしはほんとうではない」ヨハネ5：30、31。

「そこでイエスは彼らに答えて言われた、「わたしの教はわたし自身の教ではなく、わたしをつかわされたかたの教である。神のみこころを行おうと思う者であれば、だれでも、わたしの語っているこの教が神からのものか、それとも、わたし自身から出たものか、わかるであろう。自分から出たことを語る者は、自分の栄光を求め

るが、自分をつかわされたかたの栄光を求める者は真実であって、その人の内には偽りが無い」ヨハネ7：16～18。

「生ける父がわたしをつかわされ、また、わたしが父によって生きているように、わたしを食べる者もわたしによって生きるであろう」ヨハネ6：57。

キリストの人性が、罪のないものであった理由は、人性が神のうちに宿っていたからであった。人なるイエス・キリストが罪を犯さなかったのは、彼自身自身からは、また彼自身のために、また彼自身によって何もしなかったからである。キリストの人性は、神のうちに隠されていたのである。そして、彼は神の恵と真理によって満たされていたのである。イエスは天父に対する信仰によって生きたのであった。人なるイエス・キリストは、信仰によって義とされたのであった。

神の子として、イエスは父なる神の完全な啓示である。人の子として、彼の地上の生活は、この地上において、すべての人間性が神にあってどんなものになり得るかという啓示である。現代の真理が立つか倒れるかは、この前提に基づいているのである。しかし、我々は宣言する。よみの長もそれに対抗することはできない。それは天のように確かであり、神のみ座のように堅固である。

**もう一度繰り返したい：**

イエスは真理である。彼こそ神の真理である。彼こそ人間についての真理である。彼こそ、父なる神の啓示である。彼こそ、この地上にあって、人間性は神にあってどんなものになり得るかということの啓示である。

これは、あてずっぽうの業ではない。それは練りに練った人間の推論ではない。それは、何の曖昧さも許さない、靈感の言葉によって語られた真理である：

「彼が受けられた恵みは、我々のためである」1各希66。

「イエスの経験が我々の経験となるのである」2希101。

「... 彼は、無力な赤子として、我々の負っている人性を負ってこられた。『このように、子たちは血と肉とに共にあずかっているので、イエスもまた同様に、それらをそなえておられる』彼は、天使の形をとってくることはお出来にならなかった。なぜなら、彼は、人として人にあわなければ、そして彼が神と交わることによって、神の力は、それが我々とは異なった方法では彼に与えられなかったのだということを実証しなければ、彼は、我々の模範となることはできなかった。彼がへりくだってこられたのは、この地上に生存する、どんな卑しい人間でも、貧しいからとか、無知であるとかと言うことで自分はエホバの律法に従うことはできないという言い訳をする事ができないためであった」7BC925。

「キリストの完全な人性は、キリストに従うすべての者が、キリストと同じように神に服従するときに所有することのできるものである」3希1.4.7。

「キリストの勝利と服従は、本当の人間としてのそれであった」7BC929。「キリストの一生は、我々もまた神の律法に従うことができることを証明している」1希9。

「彼はご品性に一点のしみも持っておられなかったが、われわれの墮落した性質をご自分の神性に結び付けるまでにへりくだられた。このように人性をおとりになることによって彼は人性を尊ばれた。われわれの墮落した性質をおとりになって、彼がなされた十分な備えを受け、神性にあずかるものとなることによってそれがどうなり得るかを示された」QD657。

キリストの性質について、我々の知らない多くのことを我々は喜んで認める。「キリストの受肉の神秘を説明し得るものはいない」5BC1129。また、人間の性質について、我々は多くのことを知らないことを大いに告白する。「人間は、自分自信を説明することはできない。…」MM92。

しかし、我々はこれを知っている。イエスは神についての啓示であり、人間は神にあってどんなものになり得るかということの啓示であることを。人間の判断の愚かさに任せるとき、多くの真理を失うことになる。人間がキリストの性質の細部にわたって巻き込まれると、ほとんどのものを失ってしまう。イエスにあるがままの真理を仰ぐ変わりに、それを説明しようとすることに我々の時を費やしてしまうと、すべてを失うことになる。

「人間の科学は限られていて、あがないを理解することができない。あがないの計画は深遠で、哲学はそれを説明することができない。それは依然として、どんな深遠な議論によってもおしはかることのできない神秘である。救いの科学は、説明することができないが、経験によって知ることができる」2希296。

「論争や議論によっては、魂に光が与えられない。我々は仰いで見て生きなければならない」1希206。

「もしあなたがそれを理解しようと思うならば、あなたが執着している考えや、つまらないことで言い争うことをやめなければならない。謙遜な心を持って、あがないを研究しなさい」1SM343。

「イエスにある真理は、経験することが出来るが、説明することは出来ない。その高さ、広さ、深さは、人間の知識を超越している」キ実 107。

イエスは善悪を知る木に至る通路をすべて閉じられた。彼は真理が真理であることを証明しようとはなさらなかった。彼はそれを表現されたのであった。

へりくだった心をもって、イエスを見上げよう。彼の神性を見るとき、我々は人間

の粗末な衣の中に神を仰ぐであろう。彼の人性を見て、我々は義の衣の中に、人間を仰ぐのである。

### 第三天使の使命の真理

黙示録の第三天使の使命は「キリストが罪を負うためではなしに（罪を処理するためではなく）二度目に現われて救いを与えられる」（ヘブル9：28）前に、すべての人に与えられなければならない最後のメッセージである。すべての罪は、彼がこられる前に処理されなければならない。これは、確かな預言と同じように確かなものである。

「彼は言った、「二千三百の夕と朝の間である。そして聖所は清められてその正しい状態に復する」ダニエル8：14。主の聖所と（信仰によって）そこで礼拝している者たちは（黙示録11：1）、彼がこられる前に永久に清められなければならない。なぜなら、再臨の前に主はその仲保の働きを閉じられるからである。次のように記されている：

「不義な者はさらに不義を行い、汚れた者はさらに汚れたことを行い、義なる者はさらに義を行い、聖なる者はさらに聖なることを行うままにさせよ」。「見よ、わたしはすぐに来る。報いを携えてきて、それぞれのしわざに応じて報いよう。黙示録22：11、12。キリストの仲保の働きの終わりと再臨の間の期間は、7つの災害の、短い期間である。この時、聖徒たちは仲保者なしに聖なる神のみ前に立たなければならない。その時のことをヨハネは次のように描いている：

「すると、聖所は神の栄光とその力とから立ちのぼる煙で満たされ、七人の御使の七つの災害が終ってしまうまでは、だれも聖所にはいることができなかった」黙示録15：8。（初文71）。聖所に仲保者なくしてこの期間を通過し、聖徒たちは力と栄光のうちに主がこられる時、神の子の前に立たなければならないのである。だから、生ける聖徒達の人性は、イエスの人性と同じく「聖なるもの、傷なく、汚れない」ものでなければならない。（ヘブル7：26、大下397）。第三天使の使命天使の産物である者達について次のように記されている：

「彼らは、女にふれたことのない者である。彼らは、純潔な者である。そして、小羊の行く所へは、どこへでもついて行く。彼らは、神と小羊とにささげられる初穂として、人間の中からあがなわれた者である。彼らの口には偽りがなく、彼らは傷のない者であった」黙示録14：4、5。

再臨運動の預言者は次のように言っている：

「わたしは、また、悩みの時に、聖所に大祭司がおられないで神のみ前に生きるためにはどのような状態でなければならないかを悟っていない人が多くあるのを見た。生ける神の印を受け、悩みの時に保護される人々は、イエスのかたちを完全に反映していなければならない」初文149。



「品性の改変は主の来臨の前に起こらなければならない。我々の性質は純潔で、清くなければならない」OHC 278。「キリストがおいてになる時には、我々の品性は変えられない。我々の朽ちる体は変えられ、彼の栄光の体の様に形作られる。しかし、その時には、道徳的な変化は起らない」RH 8-7, 1888。

### キリストの人性

### 印された聖徒たちの人性

罪も、偽りもなし。(1ペテロ2:22) 傷なく、偽りなし(黙14:4)

思いにおいてさえ、罪を犯さなかった。(大下397) 思いにおいてさえ、罪を犯さない(大下397)

「彼のうちには悪の傾向は一瞬たりともなかった」5BC1128. 「我々は一つの罪深い傾向も保持する必要はない」7BC943.

誘惑され勝利された。(ヘブル4:15) 誘惑され、勝利する(黙3:21 (TM447))

限りなく聖霊が注がれ、印された(ヨハ5:34, 6:27) 限りなく聖霊が注がれ、印される(黙7:2, エル2:28; TM506)

仲保者がいなかった。(イザヤ63:3) 仲保者がなくなる(イザヤ59:16, 大下425)

このような人のことを「彼の栄光を補足する」民といわれている。MM 19。

### 神の聖所に示された真理

「第三の天使は、『ここに、神の戒めを守り、イエスを信じる信仰を持ち続ける聖徒の忍耐がある』と言って、メッセージを終わっている。これは、この言葉を繰り返したときに、天の聖所を指さした。このメッセージを信じるすべての者の心は、至聖所に向けられる」初文414。

イエスは、その人性において罪のない生涯を送られたばかりでなく、死んで、そして天の聖所に帰られた。それは、ご自分の民が彼のあがないの祝福を楽しむことができるためであった。第三天使の使命が、我々を天の聖所に向けさせるのは、そこにおける彼のとりなしが、彼の生涯を我々に提供するからである。

さて、この地上の幕屋の儀式においては、日毎の奉仕と、年毎の奉仕があった。「これらのものが、以上のように整えられた上で、祭司たちは常に幕屋の前の場所(聖所)に入って礼拝をするのであるが、幕屋の奥(至聖所)には大祭司が年に一度

だけ入るのであり、しかも自分自身と民とのあやまちのためにささげる血をたずさえないで行くことはない」ヘブル9：6、7。これらの奉仕は「天にある聖所のひな型と影に仕え」ていたのである。（ヘブル8：5）。ただの型である故に、使徒パウロは「この幕屋というのは今の時代に対する比喩である。すなわち、供え物やいけにえはささげられるが、儀式にたずさわる者の良心を全うすることはできない」と言っている。

「いったい、律法はきたるべき良いことの影をやどすにすぎず、そのものの真のかたちをそなえているものではないから、年ごとに引きつづきささげられる同じようないけにえによっても、みまえに近づいて来る者たちを、全うすることはできないのである。もしできたとすれば、儀式にたずさわる者たちは、一度きよめられた以上、もはや罪の自覚がなくなるのであるから、ささげ物をするのがやまったはずではあるまいか。しかし実際は、年ごとに、いけにえによって罪の思い出がよみがえって来るのである。なぜなら、雄牛ややぎなどの血は、罪を除き去ることができないからである」ヘブル10：1～4。

象徴的な儀式は、良心を全うすることができないし、それにあずかる者を完全にすることはできない。これ以上言葉で明瞭にすることはできない。しかし、ヘブル書でパウロが主張していることは、真の聖所でなされるキリストの奉仕は「良心を清め」「みもとに来る者の良心を全うし」「清められた者を永遠に全うする」事ができるのである。（ヘブル9：9、14；10：1～4；14～18）。これ以上言葉をつくして述べることはできない。聖所におけるキリストの奉仕の目的は、人間のうちに神の道徳的なみかたちを回復することである。この地上におけるキリストの人性のすべてが、信仰によって彼に従う者の人性となるのである。

昇天にあたって、キリストは天の聖所の、第一の部屋に入られたのである。（大下136）。そこにおいて、昔の儀式において象徴されていた「日毎の奉仕」を遂行なさっておられるのである。（ダニエル8：11、12）。日毎の奉仕は、許しの働きである。（レビ記4：31）。だから、真の幕屋なる天の聖所における、キリストの奉仕はその血による義認を提供し、聖霊の清めの力によって絶えざる聖化の段階を提供している。

しかし、第一の部屋におけるキリストの働きの間、教会はその目標である祝福された完全な一致と完全な品性に到達しなかった。

「降りてこられた者自身は、同時に、あらゆるものに満ちるために、もろもろの天の上にまで上られたかたなのである。そして彼は、ある人を使徒とし、ある人を預言者とし、ある人を伝道者とし、ある人を牧師、教師として、お立てになった。それは、聖徒たちをととのえて奉仕のわざをさせ、キリストのからだを建てさせ、わたしたちすべての者が、神の子を信じる信仰の一致と彼を知る知識の一致とに到達し、全き人となり、ついに、キリストの満ちみちた徳の高さにまで至るためである」エペソ4：10～13。

**繰り返して言う：**

天の聖所の「第一の部屋」におけるキリストの働きの間、教会は「信仰の一致と彼を知る知識の一致とに到達し、全き人となり、ついに、キリストの満ちみちた徳の高さにまで至る」ことができなかつた。この歴史の否定できない事実の理由は、明らかである：

キリストは聖所の働きを終わっておられないので、恵みの働きを完成なさらなかつたのである。みもとに来る者を完成するには、聖所の働きのすべてが要求されるのである。許しの奉仕は、良心を完成しないし、魂に神のみかたちを完全に回復しないのである。

「主は、悔い改める罪人をお許しになるだろうし、また実際お許しになるが、しかしゆるされても、その魂はそこなわれている」1希8。「良心は一度犯されると、非常に弱くなる」2T90。

「彼は悔い改めるであろう。同胞に対して不正な悪事をしたと認めるであろう。そしてできるだけ償いをするであろう。しかし、傷ついた良心はずっと残るであろう」3BC1158。「時には、こうしたことの愚かさを悟って悔い改めるものもある。神は、彼らをお許しになることに変わりはない。しかし、彼らは、自分自身の魂を傷つけ、一生の間、自分の身を危険にさらしてきたのである。彼らは、善悪に対して鋭敏な識別力を持っているべきなのに、その大半が破壊されて、聖霊の導きの声を認めたり、また、サタンの策略を見破ることができないまでに鈍くなった。危険にさらされたとき、ともすると誘惑に陥り、神から離れてしまうのである」キ実32。

預言の霊から、これらの言葉を引用したのは、誤解の余地を与えないためである。許しの奉仕は実に偉大で尊いものである。それは、罪のとがめを取り除き、信者に義認を与え、神のかたちに人を新たに造り変えられる。しかし、品性に神の道徳のみかたちを完成することはできない。良心を全うしないのである。つまり、天の聖所の第一の部屋において奉仕しておられる間、印された、罪なき144,000人は起こらなかつた。聖所に仲保者がなくなっても、神の前に生きる聖徒の共同体は生まれなかつたし、人の子の来臨に備えた教会はできていなかつた。

しかし、ダニエル8：14の2300年の終わりに、キリストは仲保の働きの最後の局面に入られたのである。彼は聖所を清めるために、その中のすべてのものを清めるために、至聖所に入られたのである。「それから、わたしはつえのような測りざおを与えられて、こう命じられた、「さあ立って、神の聖所と祭壇と、そこで礼拝している人々とを、測りなさい」黙11：1。

ある人は、聖所の清めは、天の聖所での出来事であって、礼拝者を清めることと何の関係もないものとしようとしている。しかし、型では、聖所の清めは民の清めであったことを示している。

「この日にあなたがたのため、あなたがたを清めるために、あがないがなされ、あなたがたは主の前に、もろもろの罪が清められるからである」レビ16：30。調査審判と最後の贖罪（あがない）の結果は、聖徒たちはその額に印されることであつた。（黙7：2）。最後のあがない（初文413）は、永遠にゆるされたという法

的な宣言以上のものを意味する。それは、聖徒たちを印し、彼らを「誘惑者の策略から永遠に安全にする」ことである。5 T 474。

もし、キリストの聖所の清めの働きに関するすべての聖句を調べると、それは聖徒たちのための恵みの働きが含まれていることを発見するであろう。至聖所におけるキリストの働きこそ、聖所に仲保者なくして生きる人々を備え、キリストの再臨に備えさせるために必須のものである。明白にするために、預言の霊を引用してみよう：

「しかし、人々は、まだ主にあう準備ができていなかった。まだ、彼らのためになされねばならぬ準備の働きがあった。彼らは、まず光を受けて、天にある神の宮に心を向けねばならなかった。そして彼らが、そこで奉仕しておられる彼らの大祭司に、信仰によって従っていくときに、新しい義務が示されるのであった。もう一つの警告と教えの使命が、教会に与えられるのであった。

「預言者は語っている。『その来る日には、誰が耐え得よう。そのあらわれる時には、誰が立ち得よう。彼は金をふき分ける者の火のようであり、布さらしの灰汁のようである。彼は銀をふき分けて清める者のように座して、レビの子孫を清め、金銀のように彼らを清める。そして彼らは義をもって、ささげ物を主にささげる』（マラキ3：2、3）。天の聖所におけるキリストのとりなしがやむとき地上に住んでいる人々は、聖なる神の前で、仲保者なしに立たなければならない。彼らの着物は汚れがなく、彼らの品性は、血を注がれて罪から清まっていなければならない。キリストの恵みと、彼ら自身の熱心な努力とによって、彼らは悪との戦いの勝利者とならなければならない。天で調査審判が行なわれ、悔い改めた罪人の罪が聖所から除かれているその間に、地上の神の民の間では、清めの特別な働き、すなわち罪の除去が行なわれなければならない。この働きは、黙示録14章の使命の中にさらに明瞭に示されている。

「この働きが成し遂げられると、キリストの弟子たちは、主の再臨を迎える準備ができるのである」大下140～141。

故に、黙示録14章の使命、または、第三天使の使命は、我々の心を至聖所に向けるのである。なぜなら、ここにおいて、キリストは人々を神の大いなる日に備えるからである。

#### 最後のあがないの真理

もう一度最初の前提にもどってみよう。すなわち、イエスにあるがままの真理に！彼の神聖に関しては、彼は、神についての真理である。彼の人性に関しては、彼は、人間性がこの地上においてどんなものになり得るかということに関する真理ある。彼の人性についての真理は、彼の神聖についての真理と同じく確かなものである。「我々の墮落した性質をお取りになることによって、彼はそれがどんなものになり得るかを示された」Q D 657。

しかし、我々は聖所の真理を必要とする。なぜなら、聖所におけるキリストの働きを仰ぐことによって、我々はどのように彼の生涯にあずかるかを知るのである。

我々の大きな過ちは、ただキリストの「日毎の」奉仕によって、我々の人間性が、この地上におけるキリストの人性のようになれると考えることである。しかし、みもとに来るものを永久に完全にするためには、二つの局面の働きを必要とするのである。例えば、日毎の許しの奉仕にあずかっているクリスチャンと、この地上におけるイエスの人性とを比較してみよう。この地上でのイエスの罪なき人性の状態と生まれ変わったクリスチャンの人性の状態の間には決定的な相違がある。「罪を知らなかった」方（2コリント5：21）は、悪の知識（経験）がなく、罪の意識もなく、過去の失敗の蓄積もなかった。悔い改めたクリスチャンはそういう状態にあるといえるだろうか？断じて否である！確かに許しは良心を悪のとがめから洗うが（ヘブル10：22）、先にも述べたように良心を完全にすることはできないのである。その経験で罪なき心を回復することはできない。「罪の意識」が除去され、悪の知識が清められ、良心が全うされるまでは、聖徒たちの人性はナザレのイエスの人性と全く同じにはなれないのである。

それ故に、イエスは、1844年に「彼の仲保の働きによって恵みにあずかるすべてのもののために最後のあがないをする」ために、至聖所に入られたのである。（初文413）。この最後のあがないこそ、さばきにおいてイエスがご自分のために与えられる最もすばらしい賜物であり、恵みの最後の、そして必須の働きであることが次の聖句に明らかにされている：

「この日にあなたがたのため、あなたがたを清めるために、あがないがなされ、あなたがたは主の前に、もろもろの罪が清められるからである」レビ記16:30。「主は言われる、その日その時には、イスラエルのとがを探しても見当らず、ユダの罪を探してもない。それはわたしが残しておく人々を、ゆるすからである」エレミヤ50:20。（大下485、486の注解を参照）。

「神の民が神のみ前にその魂を悩まし、心の清められんことを願いもとめるとき、命令が下される。『彼らの汚れた衣を脱がせなさい』。そして励ましの言葉が与えられる。『見よ、わたしはあなたの罪を取り除いた。あなたに祭服を着せよう』キリストの義の汚れのない衣が試みられ誘われてもなお忠実であった神の子らの上に置かれるのである。さげすまれてきた残りの者たちは輝かしい衣を着せられ、もう決して世の汚れに汚されることはない者とされるであろう。彼らの名は小羊の生命の書にとどめられ、各時代の忠実な者たちとともに記録されている。彼らは欺瞞者の策略に抵抗してきた。龍のうなり声によっても忠誠をひるがえさなかった。もう彼らは永久に誘惑者の策略から安全である。彼らの罪は罪の創始者に移される。残りの民は許され、受入れられたばかりでなく、あがめられるのである。『清い帽子』が彼らの頭に置かれる。彼らは神に対して王達、祭司達となるのである。サタンが

彼らの訴えを主張し、子の一団を滅ぼそうとしていたとき、聖なる天使達は目には見えなかったが生ける神の血を彼らの上に記すために往き来していたのであった」5 T 4 7 5。国指下196。

「(悩みの時)義人達は救助を求めて熱心な叫びを止めない。彼らは一つも特定の罪を思い出すことができないが、彼らの全生涯のうちに良き事は少ししか見ることができない。彼らの罪はさばきに先立って送られ、許しが記されていた。彼らの罪は忘却という国に送られ、それを思い出すことができないのである」3 SP 1 3 5。  
\*

\*「(除去された)罪を思い出すことができない」というのは、なにも過去の事件に対して健忘症になるのではない。その文の言っている以上の意味にはとりたくない。心に罪が見つからないのである。罪は間違っただけの思いと感情なのである。すべてのまちがった思いと感情が良心から全く清められるのである。こうして良心は全うされ、神のみかたちが品性に回復されるのである。

「彼らは自己の無価値な事を深く認めるけれども、告白すべき悪を隠していない。彼らの罪は、キリストの贖罪の血によってぬぐい去られていて彼らはそれを思い出すことができないのである」人あ上220。

「最後のあがないにおいて真実に悔い改めた者の罪は天の記録から除去され、もはや思い出したり、頭に浮かぶこともないようにされるのである。...」人上422。

「彼らは、自分達が無価値な事を深く感じてはいるが、告白すべき罪を隠してはいない。彼らの罪は、前もってさばかれて、消し去られている。彼らは罪を思い出すことができない。」大下393。

「だから、(調査審判において)自分の罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて本心に立ちかえりなさい」使徒3:19。大争闘下382。(1888年版には挿入部分もあった)。

「季節の終わり近くに降る後の雨は、穀物を熟させ、刈り入れに備える。...穀物が熟するという事は、魂の中に神の恵みのみ業が完結することを表わしている。聖霊のみ力によって神の道徳的かたちが品性に完成されるのである。われわれは全くキリストに似た者に変えられる。...先の雨がその働きをしないならば、後の雨は完全の実を結ばせることはできないのである」TM506。

至聖所におけるキリストの仲保の祝福を受ける生ける聖徒達は「キリストの様に全く変えられる」のである。(TM506)。地上におけるイエスの人間性のすべては、彼らも持てるものである。墮落した肉と血を持ちながら、彼らの霊的性質は純

潔で清いのである。汚れた肉体、組織、弱められた肉体的、知的、道徳的能力を持ちながら、天は印された聖徒達の罪なき人性を目撃する。イエスが仲保者なしに聖なる神の前に立ち得たように、聖徒達は聖所に仲保者なしに立つようになるであろう。彼らは主のようになるのである。

### 完全についての真理

イエスは人間の中に神の道徳的、霊のみ像を完全にする事についての真理である。なぜイエスの人性は罪がなかったのか？彼は我々には豊かに与えられない力を持っておられたのであろうか？決してそうではない。彼は人間が墮落する前の人性をとられたのであろうか？決してそうではない。彼の人性はもともと義であられたのであろうか？決してそうではない。イエスの人性が罪のないものであったのは、彼が父の内に宿ったからである。キリストの人性は神の内に宿ったのである。

「父がわたしにおり、また、わたしが父におることを知って悟るであろう」ヨハネ 10：38。[わたしが父におり、父がわたしにおられることをあなたは信じないのか。わたしがあなたがたに話している言葉は、自分から話しているのではない。父がわたしのうちにおられて、みわざをなさっているのである。わたしが父におり、父がわたしにおられることを信じなさい。もしそれが信じられないならば、わざそのものによって信じなさい。]ヨハネ 14：10、11。  
「わたしは父によって生きるのである」ヨハネ 6：57。

[わたしは、自分からは何事もすることができない。ただ聞くままにさばくのである。そして、わたしのこのさばきは正しい。それは、わたし自身の考えですのではなく、わたしをつかわされたかたの、み旨を求めているからである]「もし、わたしが自分自身についてあかしをするならば、わたしのあかしはほんとうではない」ヨハネ 5：30、31。「自分から出たことを語る者は、自分の栄光を求めるが、自分をつかわされたかたの栄光を求める者は真実であって、その人の内には偽りが無い」ヨハネ 7：18。

ここにおいて我々は、この罪なき人についての真理そのものを仰ぎ見る。それを説明しようと試みる必要はない。しかし、仰ぎ見る必要がある。人なるイエスの人性が神の内に隠れていたために罪がなかったのである。彼は神に依存し、頼り、神にあって喜び、神のみ旨に安んじたのである。自分自身では何もなさらなかった。彼の衣は天の織物で織られていた。人間の考案という糸は一本も混ざっていなかった。このようにして彼の人性に神の道徳のみ像が完成されたのであった。

さて、ここで、罪の性質について考えてみよう。天において、ルシファーは、天使は清いのであるから、義なる正しい生活をするために別に神に依存する必要はないと言い出したのである。(人あ上7)。しかし、この神から独立しようという性質

が罪そのものなのである。ルシファーと部下の天使達は、もはや神の内に生きることをしなかった。そのために墮落したのであった。神の言葉を語るかわりにサタンは自分自身から来ることのみを語るのである。「彼のうちには真理がないからである。彼が偽りを言うとき、いつも自分の本音をはいているのである」ヨハネ8：44。

そこで神は人間を造られた。アダムは神の内に生き、神が彼の内に生きるべきであった。アダムが神の内に生きていた限りは、彼には罪がなかった。サタンは、エバに、彼女自身の内に生命を持っているのだと説得した。罪のないこの夫婦が全く依存することをしなくなったとき、神に宿ることからはずれてしまった。神にのみ生命と義があると悟ったときには遅すぎたのである。今や彼らは墮落してしまった。罪深く、裸なものとなったのである。

受肉することによって、イエスは神から引き離された性質をとりつつ、それを神聖な完全のサークルの中に持ち返ったのである。人性を神の内に引き戻し、人間の心の座に神を回復されたのであった。世のあがないの内に完全に、十分に回復されたすばらしいあがないである。キリストは真理である。人間も、天使も、いかなる被造物も、彼ら自身の内には義がない。故にすべての者は、神の内に宿り、神とつながってでなければ、生命はないという永遠の真理を仰がなければならない。

この、イエスにあるがままの真理は、印された聖徒達が彼ら自身の内に、または彼ら自身で「罪なき」状態であり得ることは不可能であることを示している。自分自身で「罪なき」状態になることは、決して、断じてあり得ない。一時たりともそんなことを考えたら、彼らは最初の罪を犯してしまうことになる。人間の完全というのは、信仰によって神に宿り、神の完全に全的に依存すること以外のなにものでもない。それはイエスが生きられたように生きること—すなわち神の内にあることなのである。

「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者はわたしにおり、わたしもまたその人におる」ヨハネ6：56。「しかし、彼の御言を守る者があれば、その人のうちに、神の愛が真に全うされるのである。それによって、わたしたちが彼にあることを知るのである。「彼におる」と言う者は、彼が歩かれたように、その人自身も歩くべきである。」1ヨハネ2：5、6。「あなたがたも御子と父とのうちに、とどまることになる。」1ヨハネ2：24。

「すべて彼におる者は、罪を犯さない」1ヨハネ3：6。

「神の戒めを守る人は、神におり、神もまたその人にいます」1ヨハネ3：24。

「もし人が、イエスを神の子と告白すれば、神はその人のうちにいまし、その人は神のうちにいるのである。わたしたちは、神がわたしたちに対して持っておられる愛を知り、かつ信じている。神は愛である。愛のうちにいる者は、神におり、神も



彼にいます。」1ヨハネ14：15、16。

聖所におけるキリストの働きは、キリストのとりなしの祈りの完全な成就をもたらすものである。

「父よ、それは、あなたがわたしのうちにおられ、わたしがあなたのうちにいるように、みんなの者が一つとなるためであります。すなわち、彼らをもわたしたちのうちにおらせるためであり、それによって、あなたがわたしをおつかわしになったことを、世が信じるようになるためであります。わたしは、あなたからいただいた栄光を彼らにも与えました。それは、わたしたちが一つであるように、彼らも一つになるためであります。わたしが彼らにおり、あなたがわたしにいますのは、彼らが完全に一つとなるためであり、また、あなたがわたしをつかわし、わたしを愛されたように、彼らをお愛しになったことを、世が知るためであります」ヨハネ17：21～23。

この天父とみ子との結合が品性の完全をもたらすのである。

### 開かれた門の真理

「見よ、わたしは、あなたの前に、だれも閉じることのできない門を開いておいた」黙示録3：8。

キリストの人性の真理は、我々に聖所に入れるようにさせるものであり、彼の仲保の祝福を受けるようにさせるものである。イエスを見て、人はどんなものになり得るかということを知る時、聖所から与えられるものが何であるかを見るのである。使徒はこう言っている：

「兄弟たちよ、こういうわけで、わたしたちはイエスの血によって、はばかりなく聖所にはいることができ、彼の肉体なる幕をとおり、私たちのために開いて下さった新しい生きた道をとおって、はいつて行くことができるのであり、」ヘブル10：19、20。彼の肉体は聖所に近づかせる手段だと言われている。サタンほどこのことをよく知っているものはない。彼は、初代教会においてキリストの性質について論争を始めた。この偉大な真理は、人間の理論と推論の主題になった。学者、神学者たちは、自分なりに真理を説明しようとしたのである。彼らは真理を仰ぐことを怠ったのである。ついに、人間の「知恵」の盲目は、「マリヤの無原罪懐胎」（聖母マリヤは懐胎の瞬間から原罪を免れた）という教理を作りあげるに至った。彼らは、キリストの人性は、他の人間の肉体とはもともと違ったものであると結論づけたのである。だからイエスは、人間は神にあって、どんなものになり得るかという啓示ではないというのである。聖所に近づかせる真理は失われてしまった。「またみずから高ぶって、その衆群の主に敵し、その常供の燔祭を取り除き、かつその聖所を倒した。そしてその衆群は、罪によって、常供の燔祭と共に、これにわたされた。その角はまた真理を地に投げうち、ほしいままにふるまって、みずから栄えた」ダニエル8：11、12。

我々は今や、聖所が「清められて、正しい状態に復する」というすばらしい時に住んでいるのである。（ダニエル8：14）。キリストは今、至聖所におられて、実

体の「年ごとの奉仕」を遂行なさっておられる。イエスにあるがままの真理を我々がとらえない限り、聖所が清められ、正しい状態に回復されることはできないのである。

彼は、神につけるお方として、神の啓示であられる。人間につける者として彼は、人間性がどんなものになり得るかということの啓示である。彼の肉体は、幕と言われている。至聖所に近づける門、戸である。「キリストの完全な人性は、キリストに従うすべての者が、キリストと同じように神に服従するときに所有することのできるものである」（3希147）。信者がこのことを悟るとき、我々は「日毎の奉仕」の罪のゆるし以上の経験が必要であることを知るであろう。至聖所におけるさばき—最後のあがないは、我々聖徒のためであること、また、我々の人性をイエスがこの地上におられたときのそれと同じようにするために、我々の大祭司イエスが待っておられるのだということを知ることがある。。だから、彼は最後の罪の除去、良心の完成、後の雨による完成の印を信じるはずである。

もう一度繰り返す：

キリストの人性の真理は、この希望の門を開き、さばきの座に大胆に近づかせる。それが、我々の内に恵みの傑作の働きを成し遂げ、主の来臨に備えさせるのである。このすばらしい約束を信じて、我々は至聖所における最後のあがないへの招待に応じなければならない。

「シオンでラッパを吹きならせ。断食を聖別し、聖会を召集し、民を集め、会衆を聖別し、老人たちを集め、幼な子、乳のみ子を集め、花婿をその家から呼びだし、花嫁をそのへやから呼びだせ。主に仕える祭司たちは、廊と祭壇との間で泣いて言え、『主よ、あなたの民をゆるし、あなたの嗣業をもろもろの国民のうちに、そしりと笑い草にさせないでください。どうしてもろもろの国民に、彼らの神はどこにいるのかと言わせてよいでしょうか』」ヨエル2：15～17。

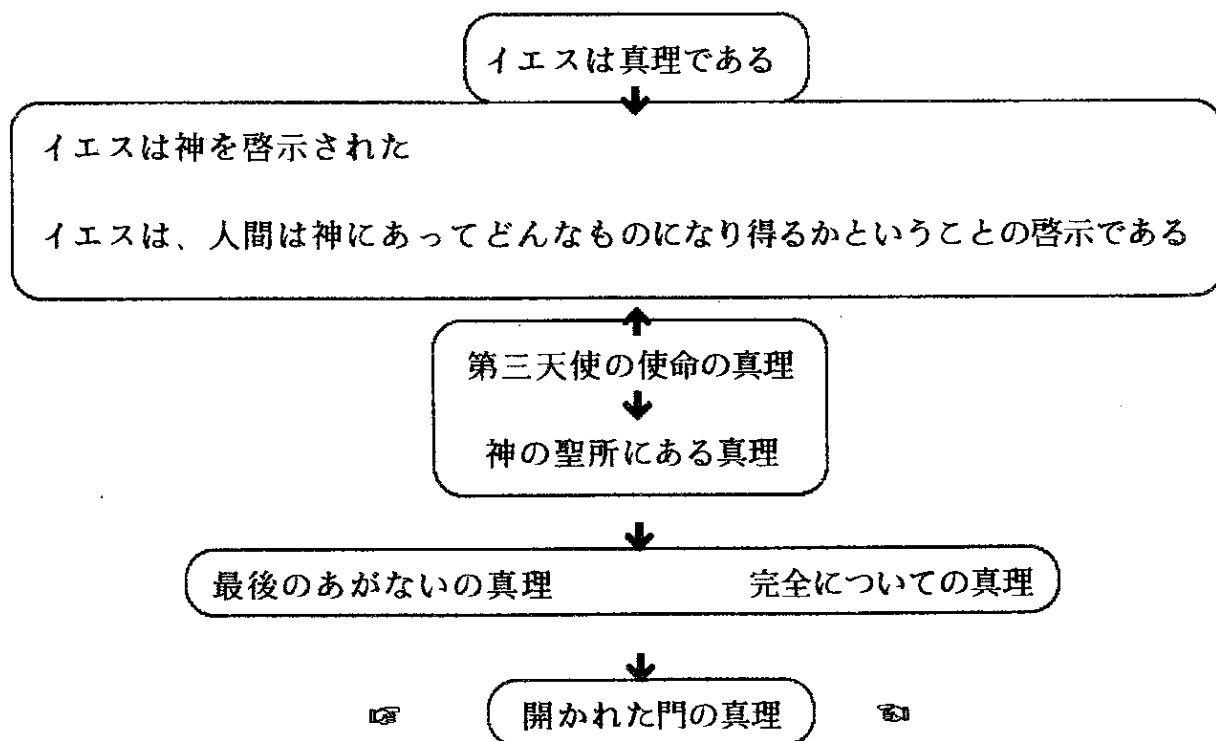
この心踊るような期待と希望のうちに乙女たちは花婿に会うために出て行くのである。「見よ、花婿が来た。出て迎えよ」（マタイ25）。あがないの日のラッパの音は強くはっきりしている。王は二度目に、最後の招待を神の民に送られる。「すべての用意はできた。さあ、婚姻においでください」（マタイ22：1～11）。ラオデキヤに対する神の最後のアピールを軽蔑する者たちは、聖所への呼びかけに反対して立ち上がることによって預言を成就することになる。（1T179～183、初文437～440参照）。そういう人々は誰と戦っているのだろうか？もし真理を投げ捨てるならば、キリストを投げ捨てることであり、主につばきすることである。主の最後の試練と十字架のときに主になされことを繰り返すことになる。中傷と偽りの報告によって戦うならば、誰と戦っていることであろう？真理は生きる。決して死ぬことはない。人は真理をあざ笑い、十字架につけるであろう。しかし、全天はその勝利を見るのである。教会で安楽いすに座って満足そうに最後の戦いを見るだけの無関心を、天はどう見るだろう？真理のためには「隠れた愛よりあからさまな非難がまだまし」である。中立は臆病であり、公然とした反抗より悪い。

「主の使は言った、『メロズをのろえ、激しくその民をのろえ、彼らはきて主を助けず、主を助けて勇士を攻めなかったからである』」士師5：23。

悔い改めは悪い命令を変えるかもしれない。

「それから僕たちに言った、『婚宴の用意はできているが、招かれていたのは、ふさわしくない人々であった。だから、町の大通りに出て行って、出会った人はだれでも婚宴に連れてきなさい』」マタイ22：8、9。

主の再臨を待ち望む者たちよ、信仰によって、今至聖所の開かれた門に入ろうではないか？婚姻の招待に応じようではないか？—それは、神性と人性の最後の結合だ。  
「見よ、花婿がこられる。出て迎えよ」



「もし、あなたがたが快く従うなら、地の良き物を食べることができる。しかし、あなたがたが拒みそむくならば、つるぎで滅ぼされる」。これは主がその口で語られたことである」イザヤ1：19、20。これらの言葉は真実である。全き服従が要求されている。完全な生涯を送ることは不可能であると言う者は、神に向かって、不正と不真実をなすりつけることになる。MS 148, 1899, R&H 2-7, 1957, E. G. WHITE ARTICLES, VOL. 6, P519.

# しかし、暖かな愛、喜び、平和はなかった

デイビッド・ミラー

あなたが自分の国のために、スパイとして働いていると想像して見ていただきたい。あなたの使命は、もう一人のスパイに会って、生きるか死ぬかの事件の情報を受け取ることである。会おうとしているスパイは、昔からの友である。あなたは彼の容姿、その声、彼のしぐさを知っている。あなたがだまされることはむずかしいだろうが、しかし可能性はある。だからよく注意してほしい。

彼をどこで見つけるかをあなたは知っている。しかし、あなたは言われたとおりに正確にする必要がある。まず、ある家に行かなければならない。その家には二つの部屋がある。味方のスパイはその家の一つの部屋に、敵のスパイはもう一つの部屋にいる。敵はあなたが会おうとしているスパイに似せて実によく変装しているのだ。よくよく気をつけなければならない。

どちらがどちらなのかを知る唯一の方法は、あなたのスパイIDマニュアル（身分証明書）を知ることである。それにあなたには、いつでもあなたの質問に答えられるボスがいる。敵もあなたと同じように、いや、あなたよりもよくそのマニュアルを知っている。彼はその中身の内容を多くまねるであろう。しかし、彼は彼の使命を達成するために間違っただけの情報をあなたに伝え、あなたの使命を達成できないように妨げようとする。気をつけていただきたい。

敵はすごい力を持っている。あなたをだますためにはありとあらゆる最新のテクノロジーを用いる。彼は光と音を用いて様々なことを行なうので、それは奇跡とも呼ばれるであろう。また、あなたの親しい味方のスパイもそのような奇跡を行なうことができるのである。偽スパイができることは、彼は全部できるし、それ以上のことができる。あなたはその違いを知らなければならない。気をつけていただきたい。

もし、正しい選択をすれば、喜ばしい事であり、安心できる。もし、過った決断をし、まちがった方を選んだなら、失敗をして、遅すぎたと後悔するまでは、そのことに気がつかない。しばらくは、あなたは正しい選択をしたと思うだろう。だまされていながら、知らずにいるであろう。敵のスパイは、ある力を与えてあなたが正しい選択をしたことを説得しようとするであろう。それでもあなたは全く納得しないし、安全とは感じないであろう。あなたは絶えず自分の状態、あなたの安全のことを考えている。あなたには平安がない。よく用心していただきたい。

新しい話ではない

ここで描写したことは、エレン・G・ホワイトが、何年も前に幻で見たことを別な言い方をしただけにすぎない。その幻とは、天の聖所の第一の部屋（聖所）を去ることと、第二の部屋に入ることに関してのものである。それは1844年のことであった。

彼女は、我々がキリストと共に、第二の部屋に入らなければならないと言っている。もしそうしなければ、我々のためにそこでなされている働きを経験することができないのである。それどころか、サタンの働きをするのであり、敵側からの偽りの力を受けることになる。神の力は、光と暖かい愛と喜びと平安をもたらす。偽りのサタンの力からは、光は来るが、そこには暖かい愛と喜びと平安がないのである。

「わたしは、父なる神がみ座からたたれて、炎の車に乗って幕の中の至聖所に入られ、お座りになるのを見た。それから、イエスがみ座から立ち上がられた。そして、頭をたれていた人々の大部分が、彼とともに立ち上がった。わたしは、イエスが立ち上がられた後で、無関心な群集には、イエスから一条の光も輝かなかったのを見た。そして、彼らは全くの暗黒の中に取り残された。．．．そこでわたしは、父なる神の前に立っておられる大祭司イエスを見た。．．．イエスとともに立った人々は、至聖所のイエスを信仰をもって仰いで、『わが父よ、あなたの霊を与えて下さい』と祈るのであった。すると、イエスは、彼らに聖霊を注がれた。その息吹の中に、光と力、そして多くの愛と喜びと平和があった」

わたしは、み座の前でまだ頭をたれている人々を見ようと思ってふり返った。彼等はイエスがそこを去られたことを知らなかった。サタンはみ座の側で、神の働きを行なおうとするかのように見えた。わたしは、彼等が、み座を見上げて、『父よ、あなたの霊をお与え下さい』と祈るのを見た。するとサタンは、彼等に汚れた力を吹き込むのであった。それには、光と多くの力とがあった。しかし、暖かな愛、喜び、平和はなかった。サタンの目的は、神の子供たちを欺いて、彼等を引き戻し、惑わすことであった」初文125、126。

上述の話、また幻から分かるように、我々の使命を達成しようと思うならば、非常に用心深くなければならない。我々はイエスと付き合うのであって、悪魔と付き合い合ってはならないのである。またどの戸を選ぶべきか、どのスパイが本物かを知らなければならぬのである。我々は神から来る光と力を受けるべきであって、悪魔から受けてはならない。最も大事なことは、暖かい愛と、喜びと平和を受けることである。それによって、我々は、正しい選択をしたことを知るであろう。

敵のスパイは非常に賢い。だから我々はマニュアルをよく知っていなければならない。聖書研究は我々の生活において非常に重要である。正しい部屋にいて、正しいスパイだと思いこんでいる多く者がだまされるであろう。我々は絶えず、ボストの祈りによって交わっていなければならない。「暖かい愛と喜びと平和」を見つければならない。あなたは正しい戸から入っただろうか？あなたはイエス・キリストとともに至聖所にいるだろうか？

もし  $A = B$ ,  $B = C$  であるなら  $A = C$  である

至聖所におけるイエス・キリストの働きは信仰による義認である。そう結論づけるには、エレン・G・ホワイトからの引用文を2つ比較してみなければならない。まず第一のものは、聖所のイエス・キリストの働きが第三天使の使命であることを言っている：

「イエス・キリストは、聖所における奉仕を終り、至聖所に入って、神の律法を納めた箱の前にたたれたとき、世界に対する第三天使の使命をたずさえたもう一人の力強い天使をお送りになった。．．．第三天使は、『ここに、神の戒めを守り、イエスを信じる信仰を持ち続ける聖徒の忍耐がある』と言って、メッセージを終わっている。彼は、この言葉を繰り返したときに、天の聖所を指差した。このメッセージを信じるすべての者の心は、至聖所に向けられる。イエス・キリストはそこで箱の前に立って、恵みがなお与えられているすべての人々と、知らずして神の戒めを破った人々のために最後の仲保をしておられるのである」初文414～415。

1888年の使命が教会に伝えられてから、2年後の1890年に、エレン・G・ホワイトは第三天使の使命についての質問に答えた。人々はそれが「信仰による義認」の教えなのかを知りたかったのである。エレン・G・ホワイトは次のように答えられた：

「数人の者が、信仰による義認のメッセージは第三天使の使命であるかどうかを問い合わせてきたので、わたしは、『それは真に第三天使の使命である』と答えた」RH April-1, 1890.

故に、イエス・キリストが至聖所に入られ、そこで奉仕しておられることは、第三天使の使命であり、また、第三天使の使命は信仰による義認である。だから、イエス・キリストの至聖所における働きは信仰による義認の教えに関するものなのである。もし  $A = B$ ,  $B = C$  であるなら、 $A = C$  である。イエス・キリストが至聖所におられる意味を知るとは、信仰による義認のメッセージを理解することである。

### ある者はだまされている

さらに考えをすすめてみよう。もしイエスが至聖所におられ、信仰による義認の働きに従事しておられるなら、サタンは聖所にいるのであるから、信仰による義認、すなわち第三天使の使命でない何かを扱っていることになる。第一の部屋にサタンとともにいる者たちは、信仰による義認の真理を信じていると思っているが、そうではない。彼らは信仰による義認という第三天使の使命を受けていないことになるし、ある偽りの教えに陥ってしまっているのである。

これこそが1888年の問題であったという事を言っておきたい。それは、今日

もなお大きな問題である。各々信仰による義認について違った考えを持っており、各々自分たちは正しいと信じている。

### ■■■■ 信仰による義認の真理とは何か？ ■■■■

今日、信仰による義認についてどれほど違った教えが述べられているだろうか？ 多くの人々は2つと答える。わたしは少なくとも3つあると思う。サタンはセールスマンである。彼は決して正しいか、誤っているかの選択をさせようとししない。彼はいつも誤りと誤りの間でどちらかを選択するように迫るのである。だから、彼は、主に2つの間違った教理の中から選ばせようとする。

この地上における彼の主だった教会は、ローマの教会である。ローマカトリックが何を教えているか、法王教はなぜそんなに成功を納めているかについてエレン・G・ホワイトは何と言っているかを読んでみよう：

「法王制はすべての欲求に（たやすい方法を求めている人々の）よくかなっている。それはほとんど全世界を包含する2種類の人々—自分の功績によって救われようとする者と、罪の中にあって救われようとする者—のために用意されている。ここにその権力の秘訣がある」 大下330。

ここにサタンは2つの選択—誤りと誤りのどちらか—を提供している。自分自身の功績に頼って救われるか、何もしないで救われるかということである。我々の救いは我々自身によらないことを認めることは誇り高い人間にとっては困難なことである。自分で自分を救うことは欲求にかなっているのである。しかし、また一方、何の努力もしないで救われようとする者、罪を続けながら救われるというのが、彼らができる第二の選択である。

### ■■■■ 歪められた信仰 ■■■■

多くの者は、二番目の「安易な」方法で救われようとする一方、ある者は巧妙な形の、行ないによる義認に導かれる。この偽りの教えは行ないによる義認と呼ばれているが、しかし、信仰による義認という名の下に巧妙に隠されているのである。それは、真理で始まって、真理の上に建っているようであるが、誤りで終わるのである。言葉使いはいつも正しい道にあると思うような使い方をしていく。しかし、その論理の終わりごろになると、たちまちその道からはずれて、ほとんど真実から見分けがつかないかのようにする。「歪められた信仰」は次のように働くのである  
ステップ1：我々は失われたことを認め、神の前に義認される必要を認める。この義認は、神のみ子の死によって可能となる。（ステップ1は真理である）。

ステップ2：我々は、神のみ子に対する信仰によって神から許しを受ける。そして聖霊を受け、神との密接な歩みをするようになる。この密接な歩みが我々に、新しい、よりよい生活をつくるのである。（ステップ2も真理である）。

している。彼等にとって自分たちの経験はあまり働かなかった人よりましだと思われる。彼等は満足して、無意識の内に彼等の経験で、さばきにまかり通ると思こんでいる。

しかし、出て行って戸別訪問し、真理を知らない人たちに、警告する燃えるような願望はない。そんなことは説教者や婦人伝道者に任せるのである。彼等の希望は今地上で安楽な生活をし、終りには救われることである。聖書の研究は深くはしない。潜在意識の中で、彼らは妨害されたくないのである。「冷たくも熱くもな」い。彼等はただ救われさえすればと望んでいるのである。彼らは、「利己的要因」とともに生きているのである。

## 第二のグループ

誤った信仰を信じる以外に、また、「ただ信ぜよ」のグループがいる。このグループは、全く必要を感じない故にイエスとともに至聖所に入っていない。彼らはたった一度か、あるいは数回しか聖所を尋ねていない。一度信じて、一度受け入れられるだけでいいと思うのである。一度罪を告白すればいいと思うのである。大体において聖書研究を否定し、このような神学を学ぶのは重要ではないと思うのである。彼等が欲しいのはただイエスなのである。聖書を持ち、引用するであろう。引用はするが、それは彼らの立場を支持するためのものである。ほんとは推測にしかすぎない、信仰でない、偽りの安全感を持っている。

## あまりにも細かい点？

この研究はあまりにも細かい点で、実際にクリスチャンと関係がないように思える。聖書は次のように言っている：

「人が見て自から正しいとする道でも、その終りはついに死に至る道となるものがある」  
箴言14：12。

エレン・G・ホワイトは次のように言っている：

「真理の道は誤りの側に接近しておかれている。聖霊が働いていない者の心には一つのように思える。だから、真理と誤りの違いをすぐ見つけられないのである」1SM202。

我々はどの部屋にいるかに注意しなければならない。そしてその違いを知っていなければならない。我々は暖かい愛と、喜びと平和を求め、我々のものとしなければならない。



この教えは真理でもって始まる。① 「カトリックは生まれながらの性質でなすどんな行為も永遠の救いを得させるものではないと信じる。．．．我々はイエス・キリストの功績によらないでは天国のために何もできない」② 「我々がするすべての善行は、聖霊の働きの結果である」③ 我々は最終的には、聖霊が我々の内になす働きによって救われるのである。上の引用文はこの第三の誤った信仰の局面を説明していないが、同じ本の次の引用文はそれを説明している：

「カトリックは、永遠の生命は神の憐れみと愛、そしてキリストの死によってわたしたちのために勝ち取られたと信じている。しかし、神は、彼を愛し、仕える者に対する報いとしてそれを約束なさったのである。我々は、神の恵みを通してよい行ないをすることによって、天の栄光を得ることができる。．．．」同 332

ここに歪められた信仰がはっきりと見られる。それは、真理を隠し、行ないによって救われるということを守るあいまいな言い方にすぎない。それは、我々は神の憐れみによって救われ、イエス・キリストによって勝ち取られたと言う。それから、報いを獲得するためには従順でなければならないと言う。最終的に我々は、善行を行なうことによって報いを受けることを発見する。「我々は、神の恵みを通してよい行ないをすることによって、天の栄光を得ることができる。．．．」と。

#### ■■■■■■■■■■ 彼らは聖霊に功績を帰す ■■■■■■■■■■

カトリックは行ないによって救われることを否定している。その代わり、彼らは信仰によって救われると宣言している。信仰のみによるということによって始まって行ないにより救われることに戻る－しかし、彼らはそのような言葉を使うわけではない。カトリックの教えは行ないによって救われることはよろしいと告げているのである。つまり、もし行ないが聖霊によって我々の内になされるならば、聖霊による行ないによって救われるのであると告げるのである。

このようなことを聞いたことはないだろうか？これに似た形のものが、1965年にわたしがアドベンチストになったころ教えられたものである。歪められた信仰は今日も広く行き渡っていると思う。つまりそれは：我々は信仰のみによって救われるが、よき行ないをしなければならぬ。我々の行為に変化がなければならぬ。我々の以前の生活を続ける自由は考えられない。それらはみな本当である。しかし、それが最後に救われようと十分に努力しているかという考えに陥ってしまえば、そこで我々は誤ってしまうのである。

■■■■■■■■■■ 1888年 ■■■■■■■■■■

1888年に、教会内では歪められた信仰が最もポピュラーな考えであったと信じる。ジョーンズやワゴナー、それにエレン・G・ホワイトは一世紀前にそれを崩壊しようと働いたが、成功しなかったのである。彼らの努力が成功に終わらなかった最大の証拠は、我々はなおここにいるということである。イエス・キリストはま

だ来ておられない。

将来の記事で1888年のことはもっと詳しく取り扱いたいと思っている。今日我々が自問自答しなければならないのは、「わたしは考え方において、ほんとはカトリック的なのだろうか？」ということである。もし答えが「イエス」であっても、我々は失望する必要はない。多くの者はなおこのように信じている。考えを変える時は今である。

歪められた信仰は間違っているとは思えないのである。それは真理であろうか？我々はそれを信じるべきであろうか？我々が本当のことを理解していないという可能性はあるだろうか？エレン・G・ホワイトは、彼女の時代に、それを理解しているものは100人に一人もいないと言われた：

「現代のメッセージー信仰による義認ーは神からのメッセージである。それは、神からの信任状を持っている。なぜなら、その実は清さに至らせるからである。．．．我々の今日の、そして永遠の幸福にあまりにも重要なこの主題に関して、聖書の真理を自分で理解している人は100人に一人もいないのである」1SM359～360。

■ 暖かい愛と、喜びと平和がない ■

歪められた信仰を真理として受け入れるときに、神に受け入れられることがステップ1であることを知る。我々はしばらくの間は、神が我々を憐れみ、受け入れて下さったことを知って喜ぶ。それから、我々は律法に従うべきであると知って、最善を尽くす。ある意味で、自分自身を恩恵期間に置くのである。我々は、最後に裁かれるためには、聖霊が我々の内に完全な業をなすことが必要だと思っている。我々は、我々のために、全く我々の外でなされたイエスの生涯と死にのみ信頼しないのである。

このような恩恵期間の考えでは、我々は神から受け入れられているということ、本当に確かなものにはできない。終りに本当に救われるかを知らないのである。思い煩い、疑うのである。最終的に受け入れられるのに必要なことを十分しようと、自分自身の経験に注目し、焦点を合わせるのである。自分自身を高めようとして、他人をさげすもうと非難的になる。確信がないのである。悩むのである。暖かい愛と喜びと、平和がないのである。

■ またもやサタンが働く ■

イエスが十字架で死なれたときなされたその完全な働きを破壊するのが、偽りの父であるサタンの大いなる望みであった。歪められた信仰は、我々が十字架に一時的な治療を仰ぐようにさせる。我々は自分たちが聖霊によって変えられるまで、この「治療」をもって、神に受け入れられたとする。この考えは、キリストの犠牲を、最初は軽視し、そして最後には無効にするものである。それはついには行ないによる義認の教えに我々を引き戻してしまうのである。

これが義認の真の方法であるなら、我々は実際には十字架を全く必要としない。神の前に正しい者とされるために、ただ生活を変える聖霊を求めればよいことになる。しかし、サタンは彼の本当の計画を隠し、真理の衣で誤りを隠しているのである。もし彼がこの偽りの教えをあるがままに提示していたなら、我々はそれが何であるか——律法の行ないによる救い——をもっと簡単に見破ることができるであろう。

パウロが我々に語っている言葉を思い出していただきたい。「わたしたちは、こう思う。人が義とされるのは、律法の行ないによるのではなく、信仰によるのである」ローマ3：28。また、「なぜなら律法を行なうことによっては、すべての人間は神の前に義とせられないからである。．．．」ローマ3：20。「律法の行ない」は、それが聖霊の力にうよろうとなかろうと律法の行ないなのである。

### 我々の覚えるべきこと

我々が神によって正しいとされること（義認）は、イエスが完全な生涯を送られたから、与えられるものである。それは我々が失敗した生涯なのである。イエスが我々の身代わりとして、神の前に立たれるのである。彼は我々の代わりにご自身の死を表わす血を提供なさるのである。彼の血は、罪人としての我々の負債を支払うのに十分である。我々はこの賜物を受け入れなければならないのである。それは、我々の側で何かしないでは与えられないものである。それは神に自分の罪を告白し、イエスが我々のためにして下さったことによって与えられる許しと、神の受け入れを求めることである。何か我々がした、または、している、するであろうよい行ないによるのではない。神は我々を忠実に許し、我々の生活を変える聖霊を与えられる。この変化は正しく、善であるが、それをもって神に我々を推薦するものでなく、また神の前に我々が義認されるものでもない。

義認はみ子の死を通してくるものである。それは、イエスが2、000年前に、我々のためになされたことから来るのであり、今日彼が我々の中になされることから来るのではない。我々にはよい業をする理由がある。しかし、それは決して義認されるためではない。それは神に栄光を帰すためであり、よいことをするためにだけである。（良いことは良いことだからするのである）。

### 限りのない円周（サークル）

一つの円（サークル）を想像していただきたい。その円のトップに「信仰による義認」がある。右の4時の場所には「ただ信ぜよ」—律法は守らなくてもいいという考えがある。8時の場所には、「歪められた信仰」—行ないによって自分自身を救うという考えがある。

## 信仰による義認の真理



我々がクリスチャンの経験を始めるときに、ほとんどの者は、トップの真理の経験に入ることから始まる。我々は律法の要求に答える良きものを持ち合わせていない。神は罪深い状態で我々を受け入れて下さることを喜ぶ。

時が経つにつれ、ある者はそのサークルに入ってしまうと、我々が元あった状態よりももっと高い状態に到達しなければならないことに気がつかない。これらの人々は4時の位置に移動しそこでストップしてしまふ。彼らは生活を変えようとも欲しないし、生命の完全な律法に近づいて前進しようという何の野心もないのである。ある者は、神の律法はもういらなくなったのだと宣言する。

またある者は、この偽りの自由主義の考えを否定する。律法に従わなければならないことを知っている。律法の一点、一画は今日も我々に生きて迫っていると知る。このグループは、8時の位置に移動し、聖霊によって変えられてついには受け入れてもらおうと努力する。これは誤った信仰である。

ある者はそこで止まり、ある者はなお進んでいく。何かおかしいことに気がついて進んでいくのである。我々は、律法に服従することにより天国を得ようと自分の業に一生懸命に努力するのに気づき始める。我々には平安もなければ、喜びもない。神に受け入れられている確信がないのである。自分自身で自分を救うことはできないことは確かである。そこでまた、サークルのトップに戻り、もう一度やり直す。また、真理を再発見して喜びに満たされるのである。

またもやり直しである。我々はまたサークル位置の、ただ信ぜよに戻ってくる。今度はもっと多くの者がそこに留まり、他の者はそこを通り過ぎる、そして歪められた信仰に戻ってくる。これで2回目である。ここでまた考える。我々は救いは信仰によってのみ与えられる事を知っている。律法はいらなくなったのではない事を知っている。しかし、我々の内に良い業を十分見いだすことができないのである。イエスの品性を学べば学ほど、自分自身がますます罪深く見えてくる。我々の唯一の望みはイエスのみであるから、また、サークルのトップに戻ってくる。そしてまたやり直し。このようにして堂々巡りをする。どこで、どのようにして恒久的な平安を見つけることができるのであろうか？我々の必要とする確証はどこにあるのだろうか？この果てしない罫からどのように脱出することができるのだろうか？何か忘れていないことではないだろうか？

利己的要因

何か欠けている。わたしはそれを「利己的要因」と呼びたい。我々は、神のことだけでなく、他人のことだけでなく、自分自身のことだけを考えているのである。我々は王国を望んで義認され、救われようと思っている。しかし、我々の多くは、我々の側で最小限度の価を払ってそこに行きたいと望んでいるのである。ある者は自分の清さとクリスチャンの優れた品性を誇りたいのである。両方とも同じ問題で悩んでいる—すなわち、「利己的要因」で。

神の律法を守る非利己的理由があるのである。それは、善であるから、善をするのである。英語の諺にこのような言葉がある。「徳とは、それ自体が報酬である」。神の道徳的律法への服従は、名誉である。「こういうわけで、律法そのものは聖なるのであり、戒めも聖であって、正しく、かつ善なるものである」。ローマ7：12。神とその律法に従うことは、正しいことである。神の十戒を守ることによって、神に栄光と誉れを記すことは、我々が毎日努力すべき事である。それをする事は利己的ではない。

それは、我々の特権として考えられるべきであり、また我々の大きな望みである。しかし、煩わしい要求としてではなく、我々の大きな欲求（望み）としてなされるべきである。神の律法は義認の目的でなく、違った目的を持っているのである。それは、我々の罪を示す。それはまた、我々のクリスチャンの成長がどの位置にあるのかを示す。守って進むことによって、我々は何が正しいかをするによって、また神に栄光を帰すことによって満足することができる。そのことを我々は喜ぶ。

利己的な要因は、我々の悔い改めは利己的であることを示す。利己的な目的で、我々の救いのために、神に立返る。このような悔い改めは、悔い改めなければならない。それは、利己的である故に、偽りの悔い改めである。

クリスチャン生活を始めるときには、大抵、我々は救われたいという願いを持っている。我々は自分自身のことしか考えない。何か間違っていることに気付く前に、あのサークルを何回かまわることが必要と思える。我々は利己的要因を理解する必要がある。エレン・G・ホワイトは、「キリストへの道」に、このことを述べておられる：

「悔い改めの意味の本当に分かっていない人が多くあります。罪を犯したことを嘆き、外面的には悔い改める人もありますが、それはその悪事のあために苦しみに会わねばならぬ事を恐れるからであります。しかしこれは聖書に教えられた悔い改めではありません。彼らは罪そのものよりは、むしろ罪からくる苦しみを悲しむのであります。エサウが家督の権を永久に失ってしまったと気づいた時の悲しみがそうでした。．．．けれどもそれは、罪に対する純真な悔い改めではなく、目的を全く変えるのでもなければ悪を嫌悪するのでもありませんでした。．．．」（マタイ27：4）キリストへの道 22、23。

そこで「利己的要因」を取り除くとき、サークルは壊れてしまう。我々はサークルのトップに行き、そこに留まる。神は我々を受け入れて下さり、助けて下さる

ことを知る、そして聖霊を与えて下さることを知るのである。我々は神に栄光を記すためにその律法を全うしようと願う。我々には暖かい愛と喜びと平和がある。

その利己的要因は取り除かれる必要があるし、それは神によってのみ取り除くことができるのである。我々はこの罪の経験を告白し、真の悔い改めを神に求める必要がある。神は我々にゆるしと真の悔い改めを与えられるであろう。「もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば、神は真実で正しい方であるから、その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちを清めて下さる」1ヨハネ1：9。

これらすべてはどのように現代の真理と関係しているのか？

アンカー7号で、我々は聖所の経験と現代の真理についての3つの重要な意見、あるいは説について論じた。いつ完全の経験が完成されるのかというタイミングについての事であった。この3つともお互いに合意しないし、ただ一つだけが第三天使の使命なのである。他の説はサタンの偽りある。サタンが提示する2つの説はまた、カトリック教会でよく使われている説でもある。それは、上で述べた2つの偽りの位置である。

再臨のときに完全になる－ただ信ぜよ

① 一つの意見は、完全はイエスの再臨の時になされるものであるとする。罪とは肉体的な乱れであるから、肉体が変えられる時に、罪の問題は永久に処理される。罪は体の中にあり、イエスが来られる時までには体は変えられないから、今は完全になることはできない。ではどうしてそれを試みるのだろうかと思う（再臨説）。これこそ上に上げた「ただ信ぜよ」の方法であり、サークルの4時の位置にある。

さばきの前に完全になる－歪められた信仰

② ある人は完全は今、さばきが始まる前、後の雨が注がれる前に必要であると言う。我々は今日、完全に勝利者となっていなければならない。すべての罪を示してもらい、ゆるされ、完全に勝利していなければならないとする。

それは、さばきは全き聖化を要求すると言う。それは、聖霊が我々の内に働いて、完全に勝利者とするために必要なすべてのものを与えられるまでは、さばきにおいて神の前に受入れられることはできないと言う。それは、我々の外なる、イエスに目を向けるよりも、我々の内に、我々の経験に目を向けさせる。（裁き前に完全になるという説）。これは歪められた信仰－8時の位置にある。

さばきにおいて完全にされる。

③ 最後の第三番目は、今日キリストの内になければならないと告げる。我々は神の前にたって知っている罪を全部告白しつつ、完全をもたらず後の雨を待ち、まだ

我々に表わし示されていない罪すべてを除去されるのを待つのである。怠けて立つのでなく、絶えずキリストにある完全を目指して進むのである。この説が真の信仰による義認である。ただイエスの犠牲にのみ頼るのである。(さばきの時に完全という説)。これは、12時の位置にある。

### 「誰がわれわれの聞いたことを信じ得たか」 イザヤ53章

上に述べたさばきの説は、あまりにも良すぎる話のように思える。あまりにも良いおとずれのように聞こえるであろう。あまりにもたやすいように思えないだろうか？「暖かい愛と喜びと平和」であろうか？

福音は良きおとずれである。イエスが我々のために死んでくださったことの良きおとずれである。「さばきの時に完全」説は、神に受け入れられるために、クリスチャンに2つの標準があるわけではないことを告げる。さばきの前に死ぬ人々は神に受け入れられるために、さばきを通らなければならない人々より安易な道を通ると思ってはならない。標準は両方とも同じである。標準は完全である。どちらの場合も、完全はイエスの生涯と死から来るのである。

2つの標準、2つの救いのあるわけではない。さばきの前に死ぬ人たちのためには、イエスの死によって救いがもたらされ、さばきの時が始まる時に生きている人々のためには、聖霊が彼らの内に働いて完全になって救いがもたらされるわけではない。そうではない！両方ともイエスが十字架で成し遂げられたことに対する信仰によってのみ裁かれ、受け入れられるのであって、聖霊が彼の内になしとげたことによるのではない。1844年以前の神に受け入れられる方法は、信仰のみによるものであった。1844年以後の、裁きにおいても全く同じなのである。第三天使の使命は信仰による義認なのである。

### 律法を無視するのではない

裁きにおいて信仰によって義認(第三天使の使命)されるのを待っている神の民は、律法を無視するのではない。神の律法を全うしたいというのは、彼らの最高の願望なのである。「利己的な要因」は彼らの生活からなくなる。神のみ名をみだりに使いたくないのである。彼らは姦淫を犯したくないのである。罪の考えは、彼らにとって、嫌悪すべきものである。罪を犯したくないのである。もしそうするならば、神のお心に何をするようになるかを大いに恐れるのである。彼らは完全をもたらず後の雨の聖霊の注ぎを待ち望むが、待っている間、怠けて立っているのではない。TM506~508を参照のこと。

彼らはの聖霊の注ぎを求める。神の愛の知識を他に分かち与えるために清い品性と力を持ちたいと欲する。将来に変化を見つけようと腕をこまぬいてただ待っているのではない。彼らは心の純潔——聖霊の力を求めてきた。彼らはいつでもどこでもできる限り、伝道の働きをしてきた。

イエスの栄光と誉れのために、イエスのように全く変えられたいと願望するので

ある。彼らの最大の望みは神に仕え、その戒めを守ることなのである。彼らの最大の恐れは、罪を犯して神の聖なるみ名を辱めはしないかということである。彼等は神を失望させはしないかということ恐れる：

「神の民は、彼らを滅ぼそうとする敵に取り囲まれるが、しかし彼らの味わう苦悩は、真理のために受ける迫害を恐れてのものではない。彼らは、自分たちがすべての罪を悔い改めているかどうか、また、自分たちの中の何かの過ちによって、『全世界に臨もうとしている試練の時に、あなたを防ぎまろう』という救い主の約束の成就を妨げるのではないか、ということ恐れるのである（黙3：10）。もし彼らが許しの確証を持つことができるならば、拷問も死をもいとわないであろう。しかし、万一、許しに値しない者であることが分かって、自分自身の品性の欠陥の故に生命を失うようなことがあれば、それは神の聖なるみ名を辱めることになってしまう」 大下392。

### 今日の二つのグループ（の中の一つ）

聖所にいる者たちは、日毎の経験をもってさばきの時に神から受け入れられると信じるであろう。日毎の経験のうちに完全を見つけようとし、さばきにおいて、神の前で最終的な義認を見つけようとする。彼らは、完全も、さばきも聖所では起こらないということに気がつかない。

神は後の雨の時に聖霊を注ぎ、品性を完成しようと計画しておられる。しかし、多くの者は、なお聖所にいて、日毎の経験に頼っている。彼らは、第二の部屋の祝福を求めないで、第一の部屋の祝福を求めている。

彼らはキリストにしたがって至聖所に入っていかなかった。彼らは、キリストの生涯と死よりも、むしろ、彼らの日毎の経験に信仰をおいて義認されようと求めているのである。彼らも、至聖所にキリストと共に入っていった者たちと同じように、完全を求める。しかし、彼らは、彼ら自身の内の完全を、さばきをパスするためのチケットとして提示したいのである。彼らの外でイエスがなされたことに信仰をおかない。彼らのうちに聖霊によってなされたことによって神に受け入れられようとするのである。彼らは真に第三天使の使命を理解していないのである。真に信仰による義認を理解していないのである。彼らには暖かい愛と喜びと平和はない。

### サブグループ（少群）

このグループの中にもう一つのグループがある。このサブグループは自分自身を救うために自分の経験により頼む。しかし、彼等は、幾らか低い標準をもっている。

彼等は教会に毎週行く。什一を払い、安息日学校の教課を学ぶ。たばこは吸わないし、不健康な飲み物は飲まないし、不健康な食べ物は食べない。長年SDAであった人もいる。教会の働き人から引退した人もいる。何年か安息日学校教師、執事であった人もいる。彼らはこれらの経験で満足し、これくらいの標準のレベルで安心



している。彼等にとって自分たちの経験はあまり働かなかった人よりましだと思われる。彼等は満足して、無意識の内に彼等の経験で、さばきにまかり通ると思いつている。

しかし、出でいって戸別訪問し、真理を知らない人たちに、警告する燃えるような願望はない。そんなことは説教者や婦人伝道者に任せるのである。彼等の希望は今地上で安楽な生活をし、終りには救われることである。聖書の研究は深くはしない。潜在意識の中で、彼らは妨害されたくないのである。「冷たくも熱くもない」。彼等はただ救われさえすればと望んでいるのである。彼らは、「利己的要因」とともに生きているのである。

## 第二のグループ

誤った信仰を信じる以外に、また、「ただ信ぜよ」のグループがいる。このグループは、全く必要を感じない故にイエスとともに至聖所に入っていない。彼らはたった一度か、あるいは数回しか聖所を尋ねていない。一度信じて、一度受け入れられるだけでいいと思うのである。一度罪を告白すればいいと思うのである。大体において聖書研究を否定し、このような神学を学ぶのは重要ではないと思うのである。彼等が欲しいのはただイエスなのである。聖書を持ち、引用するであろう。引用はするが、それは彼らの立場を支持するためのものである。ほんとは推測にしかすぎない、信仰でない、偽りの安全感を持っている。

## あまりにも細かい点？

この研究はあまりにも細かい点で、実際にクリスチャンと関係がないように思える。聖書は次のように言っている：

「人が見て自から正しいとする道でも、その終りはついに死に至る道となるものがある」  
箴言 14 : 12。

エレン・G・ホワイトは次のように言っている：

「真理の道は誤りの側に接近しておかれている。聖霊が働いていない者の心には一つのように思える。だから、真理と誤りの違いをすぐ見つけられないのである」 1 SM 202。

我々はどの部屋にいるかに注意しなければならない。そしてその違いを知っていなければならない。我々は暖かい愛と、喜びと平和を求め、我々のものとしなければならない。



# 激動の嵐—最後の戦い



ダニエル 11:40~45, 12:1~3

ダニエル 11章の最後の6節の聖句は重要な諸事件が恩恵期間に向かって動いていく様子が、非常にはっきりと描写されている。この聖句はダニエル 11章でも最も重要な部分である。なぜなら、それは現在起こっている諸事件を描写しているばかりでなく、神の教会の最後の戦いと救助を順序を追って説いているからである。

## ダニエル 11章を解くガイドライン

1節ずつ調べる前に、その解釈のガイドラインを捉えておこう。

### ダニエルの預言の目的：

ダニエル書のメッセージは、一言でまとめると、回復である。バビロンで失ったすべてのものの回復である。ダニエル 2章は、王国の回復を提示し、ダニエル 7章は王の回復に焦点を当てている。ダニエル 8章は、聖所の回復がハイライトである。ダニエル 10~12章は、全書をまとめて、不信心な権力の支配からの回復を描写していると言える。天使が幻の最初にダニエルに言ったことを覚えているだろうか。「末の日に、あなたの民に臨まんとする事を、あなたに悟らせるためにきたのです。この幻は、なおきたるべき日にかかわるものです」。ダニエル書 10:14。だから、最後の時に、神の民に臨む戦いと、神の民の勝利が、この重大な主題であるということをまず覚えていなければならない。

### パレスチナ的用語の使用：

ダニエルの4つの預言（2章、7章、8章、11章）はすべてダニエルの時から始まったのである。その時には、パレスチナが神の民の根拠地であった。預言に登場する大帝国の国々は「美しい国」の周りであった。世界の文明の2大センターが2つの川に沿って発達した。すなわち、メソポタミアのユフラテ川と、エジプトのナイル川であった。パレスチナは、この2大権力の間位置していて、緩衝国（かんしょうこく）（二大国の間に介在して衝突を緩和する役目をする中立国）としての役目を果たしていた。幾世紀にもわたって、イスラエルは北の勢力と南の勢力との

間で繰り返される闘争を目撃してきた。

一つ一つの預言が成就し、やがてキリスト教の今日の時代になると、パレスチナという地理的な舞台は代わり、世界的な範囲に移っていく。パレスチナでの、神の民であったユダヤ人がその周りの勢力によって脅迫されていた時代から移り、預言は反キリストと神の民、キリスト教会との戦いを描いている。十字架以後は、国家としてのイスラエルは、神の最高の関心の的ではなくなってしまった。中東は最後の戦いの中心ではない。それでも預言では、最後の戦いを描写するのに、旧約聖書の、パレスチナ的用語が使われているのである。

移り変わり

舞台 : パレスチナ → ヨーロッパ → 全世界へ  
神の民 : イスラエル → キリスト教会 → プロテスタント → 再臨運動 (SDA)

**黙示録はダニエル書の注解書である :**

旧約聖書のすべての預言は、パレスチナの言葉で表現されている。黙示録の明確な光りなしには旧約の預言を解釈することは不可能である。黙示録は旧約聖書のモザイクである。旧約の預言がよく引用されており、その特別な表現をどのように理解すべきかを示している。例えば、バビロンといえ、今は、背教した宗教界を象徴している。エジプトといえ、無神論世界、イスラエルといえ、三天使の使命の信者を象徴している。(黙17章、11:8、7章、14章)。黙示録はダニエル書を開く書であるから(黙10:TM112~115)、ダニエル11:40~45の重要な預言が黙示録にとり扱われ、明らかにされていると期待している。新聞を中心に預言の解釈をするのではなく、聖書を預言の解釈に用いなければならない。

**4つの預言のアウトライン :**

繰り返し、並行、拡大の原則

ダニエル書の預言は一つのユニット(単位)になっている。ダニエルの4つの預言が並行していること(パラレル)を知り、繰り返しながら、更に詳しく描写されていることを念頭に置いたら、テーマからはずれずに、正しく捉えることができる。ダニエル8章は、ダニエル7章に並行していることを知ると、ダニエル8章の聖所の清めは、ダニエル7章のさばきであることが分かる。ダニエル9章は、ダニエル8章に関係しているので、さばきは1844年に始まったことが分かる。もし、並行(パラレリズム)という原則が確立されなければ、再臨運動(アドベンチズム)の聖書的根拠もない。ジェームス・ホワイトは4つの預言の並行式をよく認知していて、それからはずれるとダニエル11章の預言の解釈においても『再臨運動によっ

て完全に確立されたランドマーク』からずれてしまう危険について警告した。ジェームス・ホワイトは次のように書いた：

「ダニエル書の4つの時にわたっている預言の流れを簡単に見渡してみよう。2章、7章、8章、11章に、同じ問題について一貫した時代の流れが表わされていることはよく知られていることである。まず、2章の、バビロン、ベルシャ、ギリシャ、そしてローマを表わす大いなる像は、純金、銀、銅、そして鉄で表わされている。この足の部分がトルコを表わしているのではなく、ローマを表わしていることはみんなが賛同している。それから、(7章の)しし、熊、ひょう、そして10の角を持った獣は、2章の像と同じことを表わしていると知るとき、火の炎で滅ぼされるのは、トルコでなく、ローマという獣であることに皆賛成する。8章においてもそうである。君の君たる者に敵して立ち上がる小さい角はトルコでなく、ローマである。これらはみな、最後の政治権力はローマであることを示している。

さて、議論の焦点になっているポイントは、ダニエル書の預言の11章は、2章、7章、8章で描写されていた同じ勢力を言っているのであろうか？もしそうであるなら、最後の11章に記されている権力は、ローマである」

RH, 11月, 29, 1877.

## ダニエル 11 : 40 —

「終りの時になって、南の王は彼と戦います。北の王は、戦車と騎兵と、多くの船を持って、つむじ風のように彼を攻め、国々に入っていく、みなぎりあふれ、通り過ぎるでしょう」

「終りの時になって」 ダニエル12:4から7によると、「終りの時」はダニエル書が開かれる時、また、1260年の法王制の支配が終わる、1260年の終りから始まるのである。(黙10章を参照)。これは1798年であった。ダニエルはまた、もう一つの年代に言及している。すなわち、2300日の預言が1844年に終わるということである。古代バビロンが539B.Cの没落が536年B.Cのバビロン捕囚の終焉に道を備えたように、1798年の法王至上権失墜が1844年の、霊的バビロンからの救出のために道を備えたのであった。(国指下314参照)。「終りの時」という表現は、ダニエル11章の文脈から考慮したとき、シオンの巡礼者たちのためにまことにすばらしい希望と慰めを与えるのである。ここまで、39節も使って、ダニエル11章に、チグリス川(ギリシャ語)(ヒデケルーヘブル語)で見せられた幻の中で長い、長い戦いを描かれている。時々聖徒たちにとっては、暗黒の君との戦いは、決して終わりそうもないかのように思えたであろう。神とその真理に対して戦いを挑む権力に次ぐ権力が立ち上がる時、「おお、主よ、いつまで続くのですか？」との叫びが地からのぼった。

間違ふことのない、宇宙のタイムキーパーであられるお方によって定められた最後

の時が遂に来たのである。40節に「終わりの時になって」と宣言している。何の終わりなのであろうか？教会の長い悪との戦いの終わりの時である！権力と偽りによる支配の終わりである。異邦人の時の終わりである。しかし、何よりも、神の真理の擁護とご自分の民を救出するために神が働かれる最後の時である。

「南の王は彼と戦います」 エジプトは終始一貫して南の王であった。42節、43節も例外ではない。しかし、中東のエジプトは、もはや聖書の預言的ではない。この預言は、キリスト教時代に位置しているのであり、エジプトは「前の時のようではありません」（ダニエル11：29）。黙示録によると、現代のエジプトは次のように言われている。「彼らの死体はソドムや、エジプトにたとえられている大いなる都の大通りにさらされる。彼らの主も、この都で十字架につけられたのである」黙示録11：8。

E. G. ホワイトは、現代のエジプトについて次のようにコメントしておられる：

「証人たちが大通りで殺され、その死体を横たえたという『大いなる都』は、エジプトに『たとえられて』いる。聖書歴史に現われているすべての国々の中で、エジプトほど、生きた神の存在を大胆に否定し、神の命令に抵抗した国はない。また、エジプトの王ほど、天の権威に対して、公然たる横暴な反逆を企てた王はない。モーセが主の名によって、彼に使命を伝えたとき、パロは高慢に答えた。『主とはいったい何者か。わたしがその声に聞き従ってイスラエルを去らせなければならないのか。わたしは主を知らない。またイスラエルを去らせはしない』出エジプト5：2。これは無神論である。そして、エジプトにたとえられた国は、同様に、生きた神の要求を拒み、同じような不信と反抗の精神を表わすのである』大上344、345。

1260年の法王至上権支配の終わりの近くに、長年にわたって法王制度に最も熱心だったフランスは、フランス革命のときに、無神論に変わってしまった。今世紀に至るまで、フランスについてこう言われている：

「... フランスは、議会の決議によって無神論を宣言し、首都の住民全体と他の地域の大群集とが、男も女もその宣言を喜び、歌い踊ったという、世界史上唯一の国である」大上346。

フランス革命は、法王制の腐敗に対する反応であった。

「ローマは人々を弾圧し、苦しめてきた。そして今度は、墮落し狂暴になった大衆が、ローマの暴虐をはねのけて、すべての束縛を投げ捨てた。彼らは、自分たちが長い間尊敬を払ってきた華麗な詐欺に憤激して、真理と虚偽の両方を拒絶した。...

「処刑台は、司祭の血で赤く染まった。... ローマ・カトリックの司祭たちは、鎖で腰かけにつながれてかいをこぎ、教会が穏和な異端者たちに容赦なく味わわせ

た苦悩を、あますところなくなめたのであった。．．．」大上360～362。

「エジプト」に関して、エレン・G・ホワイトは「これは無神論である」と書いた。終りの時の南の王の活動は、ローマの教会に対するフランスの残忍な反抗に留まらなかった。フランス革命で生まれた「新しいサタンの権力、無神論」、不信と自由主義の理論は全世界に蔓延していくのであった。

「フランス革命をひき起こしたのと同じ教えの世界的な広がり、—こうした全てのことが、フランスを揺り動かしたのと同様の争乱に全世界を巻き込むのに役だっている（方向に向かっている）」教育269～270。

共産主義もまた、そのルーツはフランス革命にある。1848年に、マルクスは共産党宣言を書いた。そして、1917年に起こったロシア革命は、世界歴史に知られる最大の無神論国をつくった。共産主義思想は、元をたどれば、ギリシャのプラトーにたどりつく。紀元前300年に書かれた、プラトーの「[THE REPUBLIC]（共和国）」に、彼は、共同所有を強調した。彼は、理想国家は市民を正しく、徳を備えるように訓練し、各自は自分に最も適した働きをすべきであると教えた。ローマ・カトリックも、共産主義も、そのルーツはプラトーに見られる。

ダニエル11：40は、終りの時に、エジプト（無神論主義）が北の王（法王教）に「戦います」（挑戦する）と言っている。フランス革命の始めに、法王教はほとんどその力と影響を失ってしまった。それというのも世界的な無神論勢力のためであった。東ヨーロッパのカトリック国の多くは共産主義の支配下に陥った。ベトナム戦争においても、南の王（共産主義）は法王教に挑戦した。南ベトナムはカトリックによって支配されていたのである。南ベトナムが共産主義に抵抗するよう支持を与えるようにアメリカに影響を与えたのはスペルマン枢機卿であった。カトリック教会は共産主義により、キューバも奪われてしまった。しかし、不思議なことにカトリックは共産主義に対する防波堤になどころか、カトリック国の多くは共産主義の温床でもあったのだ。

世界の本当の戦いは、イデオロギーのそれである。それは心の戦いである。カトリック教会は、共産主義によって反撃の苦をなめたばかりではなく、一般的には、ただ無神論哲学の別な形の知性偏重主義と自由主義の勢力によって痛めつけられてきた。カトリック教会内においてさえ、「エジプト」の哲学と悪戦苦闘しているのである。これら全ての反宗教勢力が「エジプト」南の王は、宗教界のとりでに挑戦していることになる。

ところが、驚くべきことが起こるのである。それは：

「北の王（法王教）は、．．．**つむじ風（激動嵐）**のように彼（南の王）（無神論勢力）を攻め、国々に入って、みなぎりあふれ、通り過ぎるで

しょう」とある。

今日の共産圏の激動、動乱、は、まさにダニエルの預言の明白、確実な成就ではな  
かろうか？東欧諸国の民主化、ソ連クーデターの失敗は我々に何を警告するだろ  
うか？

共産主義（無神論主義－エイシイズム）とカトリシズムの争闘、北の王と南の王の  
冷戦も終焉に移りつつある。

そしてプロテスタンティズム、アメリカのリーダーシップを取ることは否めない事実  
となりつつある。アメリカが、全世界をローマの支配下に置くその日がもう目前に  
迫っている。国々が国連に加盟する。もう国連加盟国は166か国となった。国連  
が、アメリカのニューヨークに置かれているのも偶然ではない。湾岸戦争でも、国  
連はアメリカの指揮下にあったようなものだ。ある評論家は、ヨーロッパ共同体（  
EC）が来年出来上がったなら、世界は、アメリカとヨーロッパの2極体制になる  
だろうという。ある人は「日の出る方」日本の時代が指導権を取ると豪語する。し  
かし、ダニエル11章、黙示録13章、17章では実に近い将来、ローマはアメリ  
カの権力を利用して全世界を支配することは確実である。その日は非常に迫ってい  
る。

しかし、覚えていよう！ダニエル11章の預言のフォーカル・ポイントは（焦点）  
は、共産主義でもなく、カトリシズムでもなく、プロテスタンティズム、心霊術で  
もない。もう一度見てみよう：

「末の日に、あなたの民に臨まんとする事をあなたに悟らせるためにきた

のです。この幻は、なおきたるべき日にかかわるものです」

ダニエル10：14。

さあ、最後の神の民に、SDA教会に何が待っているのでしょうか？

――次回に続く――

# 赤い国から来た

から

# ローマ法王

新鮮で力強い  
指導者の出現

1948年、ヨーロッパの指導的神学者カール・バルトは次のようなうがったコメントをした。『正直に言って私は彼ら（ローマ・カトリックと共産主義）との間に何かのつながりを見る。両方とも全体主義（一国一宮主義）であり、両方とも人民を一つとして主張する。共産主義は（イエズス会から学んだ事であるが）ほとんど同じ方法を使っている。しかし、ローマ・カトリックはその中でプロテスタントにとっては、もっと危険である。共産主義は消え去るであろう。カトリックは永続するであろう。』  
ポール・ブランシャード「アメリカの自由とカトリック勢力」293





黙示録 17 章に赤い獣に大淫婦が乗っている預言がある。女は聖書の預言では宗教権力を表わす。純潔な女は、神の真の教会を（黙 12 章）、淫婦は背教した教会を表わす。この女－宗教権力－法王教は 1798 年に「致命的な傷」を受けて、ヨーロッパを支配した政治力を失ってしまった。しかし、終わりの時に、この女、大淫婦が獣に乗るとは、再び宗教権力と世界政治権力が合体することを示している。しかも、この女は「地の王たちを支配する大なる都のことである」とある。17 : 18。さらに「多くに水の上になすわっている大淫婦」とも表現されている。17 : 1。全世界の指導者、全世界の民族を支配するとの預言である。

赤い獣とされているのはどういう意味があるのだろうか？赤は、血、迫害を表わす。また、黙 12 章では「赤い龍」とも言われている。「サタンの」「サタニズム」の象徴であろう。今日、「赤」というと一般的に共産主義を象徴している。「無神論」である。するとバチカンが共産主義と合体するのであるか。または、世界支配陰謀にいそしむフリーメーソン－イルミナチ（秘密結社）と合体するのであるか？一般の書店に出回っている世界支配陰謀書にフリーメーソンに乗っ取られるバチカンなどとあるが、そうではなくて、世界支配を共同作戦で成し遂げようとする時が来たのであると解すべきであろう。

ここで誤解してならないことは、東欧の民主化、ソ連のクーデター失敗、共産党一党独裁の崩壊という現象は、共産主義イデオロギー、または無神論思想の消滅ではないということである。「フランス革命をひきおこした同じ教え」は世界的にひろがり、「フランスを揺り動かしたのと同様の争乱に全世界をまきこむ」のである。教育 169。

週刊サンケイ 1-3、別冊「ローマ法王訪日とバチカン」の「赤い国から来たローマ法王」という記事は、新鮮で力強い指導者の出現と評している。ヨハネ・パウロ II 世は、初めての共産圏、赤の国からの法王として知られている。自由、平等、博愛をその教えの基調と言われているフリーメーソン－イルミナチは、フランス革命を起こした勢力でもある。それが共産主義を作ったとも言われている。それが今日バチカンに浸透していることは事実らしい。

世界支配陰謀は共同合作とはいえ、新しい世界秩序、世界政府が成り立ったとき、つまり政治的に、経済的に世界が一つにまとまったときに、その上に君臨するのが女（宗教権力）－カトリシズムなのである。そして、自分たちのドグマ（宗教上の教義）を強要するのである。

かの有名な歴史家、アーノルド・トインビーは「21世紀は、宗教の世紀である」と言った。その方向に向かって世界は激動し続けている。そのために宗教家たちが策動している。そのための来年のEC統合（ヨーロッパ統合）なのである。ECの創始者であるフランスの経済学者、ジーン・モーネット（カトリック信者）はヨーロッパが、経済的に一つになれば、必然的に政治的に一つになる。しかし、究極の目的は宗教的に一つになることだと言った。

最近の世界の諸事件はそのことを我々に告げているのではなかろうか？ベトナム戦争、イラク、湾岸戦争に宗教がどのように関わっているかという興味深い記事があったので一部を紹介したい。

宗教パワーと世界政治－バチカン、イスラム、新宗教

室生忠

三一書房

## ベトナム戦争とカトリック

重要なことはカトリックが欧米諸国の世界政治にまでコミットした結果、欧米列強の歴史的な世界制覇戦略、世界植民地戦略を、裏側から精神的に補完する役目を担ったことであった。昨年（1979年）夏に開かれた第三回世界宗教者平和会議の席上、初参加した中国代表団が「汝の敵を愛せよ」と言っても、キリスト教が中国大陸を侵略した史実は明白であり、中国キリスト教が国内で批判される点もここに集中している」と発言したが、それは客観的に見る限り正当な指摘であった。

こうした欧米の世界戦略とカトリックの関係は、アメリカが強権によって民族自決に介入したベトナム戦争にも端的に表れていた。朝鮮戦争が1950年代の世界を決定づけた戦争であったとすれば、ベトナム戦争は、1960年代から70年代にかけての世界を決定した戦争であった。

ベトナム戦争を遂行するにあたって、アメリカが「共産主義の脅威から自由主義世界を守る」という「反共十字軍」の思想を宣伝したことは、すでに述べたとおりである。この戦争に対して、カトリック、特にアメリカのカトリックは、当初は、「反共聖戦論」を支持してはばからなかった。

アメリカは、プロテスタントの一派、ピューリタンによって開かれた国で、歴史的には、バチカンとの関係は良いものではなかった。両者の関係が緊密になったのは、1930年、米大統領ルーズベルトがC・テラーをバチカン市国に大統領特使として駐在させてからだった。K・V・アーレティンは「1948年以後、アメリカのカトリック者は頑迷な反共路線に落ち込んだ。その代表者は（ニューヨーク大司教）フランシス・スペルマン枢機卿とカトリック者の上院議員ジョー・マッカシーだった。カトリック者は、ヨーロッパでもそうだったが、特にアメリカで冷戦の忠実な担い手となる危険を冒していた」（『カトリシズム』）と述べている。

ベトナム戦争に関してアメリカのカトリックを中心とするキリスト者が、どのよ

うな対応を示したかについて、関場理一氏は次のように述べている。

「『南ベトナムでアメリカが軍事的に勝利をおさめることはキリストの意志である』とまで豪語したニューヨークのスベルマン枢機卿や、“ベトナム聖戦論”に立って福音を説いたピリー・グラハムの発言を、アメリカの戦争遂行者達が全面的に利用し、いわゆる“反共十字軍”として世界のキリスト教界を動員していたために、キリスト教界においては、ベトナム戦争に反対するか否かは、『反共』か『容共』かの踏み絵ですらあった」（『ベトナム戦争と平和運動』）

このキリスト教の反共思想が、ベトナム戦争の激化を背景に日本にもおしよせた。当時は、日本は新安保体制のもとで、反ソ、反中の反共防波堤の要に位置していたからである。また日本宗教界は、アジアにおける反共宗教運動の“要”でもあった。

1961年5月、アメリカからクリスチャン・クルセードが来日し、東京都体育館でキリスト教の信仰からする反共十字軍を呼びかけた。翌62年2月には、MRA（道徳再武装）世界会議が小田原で開かれ、財界の支援によって、MRAアジア・センターが小田原に作られた。

「MRAは、アメリカのルーテル派牧師フランク・ブックマンが創始した宗教運動で、共産主義に対抗して新しい人間による新しい世界建設をとらえ、冷戦の激化とともに、ヨーロッパ、ラテン・アメリカに進出し、さらに日本を拠点に、アジアにおける反共宣伝の一翼を担う活動を開始するにいたった。．．．米ソ冷戦の激化の中で、アメリカの世界戦略を積極的に支援してきたバチカンも、日本におけるカトリックの活動を重視し、人的、物的支援を強化した。1960年3月、バチカンは、東京大司教土井辰雄を、日本人最初の枢機卿に任命した」（村上重良氏『現代宗教と政治』）

重要なことは、こうしたベトナム戦争とキリスト教（バチカン）の関係が、「反共」を基調とする国際的な「宗教協力」、「宗教平和運動」に、決定的な影響を与えたことである。ベトナム戦争を遂行させるため、アメリカはより強烈にベトナム戦争聖戦論を前面に押し出し、それを全世界にPRすることによって、西側の国際世論の支持を取りつけようと図った。そのPRと世界誘導の回路として、全世界の宗教が動員され、必然的にそれらの宗教間の連携が進む結果になったのである。

1970年に発足した世界宗教者平和会議とは、その後の世界情勢の質的な変化（後述）によって生まれたものだったが、本質的には、ポスト・ベトナム戦争に向かって歩き出していた西側世界戦略の、暗黙の要請にもとずいて生まれたものといっても過言ではない。

西側のリーダーシップによる世界の巨大宗教会議の背景に、必ずキリスト教、バチカンの影が投影している事実の背景がおわかり頂けたと思う。まず第一には、バチカンが持つ世界最大の宗教としてのステータス、その宗教会議が、いかに深くバチカンと接触し、バチカンの支持をいかに強く取りつけているかが、その会議自体のステータスにつながった。必然的に、宗教会議の方から、バチカンへの接触を望む結果になった。さらに第二には、バチカンが持つ政治的な影響力。世界政治を支配する東西対立の中で、西側のリーダーである欧米の政治動向に直結するバチカンが、その宗教会議に関与することは、その会議に、政治的な意味でのステータスを

も付与することになったのである。

バチカンの存在を抜きにしては、世界の宗教と政治の動きは理解できないのである。そして、アメリカの世界戦略の一環に組み入れられているが故に、日本もまた、国民たちが、それとは気づかぬままに、間接的にはあるが、バチカンの強い影響下に置かれているといえるのだ。

キリスト教、特にカトリックは湾岸戦争にどのように関わったか？

## いま世界が動く

危機の連鎖が世界を変える  
日高義樹 + NHK取材班

### 20世紀の宗教戦争

「宗教戦争」というとき、私たちが真っ先に思い浮かべるのは、ホメイニ、イラン・イラク戦争そしてフセイン．．．とイスラム世界のことである。ところが今回、アメリカも、異様なほどの「宗教的」ムードに包まれていた。「ブッシュは宗教戦争をしている」という批判が若干ささやかれ出したものの、たちまち吹き飛んでしまうほどに、熱狂的な宗教色が社会を覆った。

日曜日、教会は、戦争の勝利と戦地へ出向いた兵士たちの無事を願う人々の祈りで満ちていた。大統領も、欠かさず教会へ出向いた。戦争が始まって半月、大統領は二月三日の日曜日を「ナショナル・プレイヤー・デー（祈りの日）」と宣言。国民全員が、アメリカのため、兵士のため、戦争勝利のために心を一つにして神に祈りを捧げようと呼びかけた。以下は、ブッシュ大統領が湾岸戦争中、公の場で行なった宗教的な発言の一部である。

「人間は神なしでは生きてゆけない。この戦いは『聖戦』だ。この原理は古くはギリシャ、ローマの哲学に端を発し、聖アウグスティンらによって理論づけられたキリスト教独自のものである．．．。あらゆる戦争には理由がある。『聖戦』の場合、それは、正義に基づき、利己的でなく、道徳的なものでなければならない．．．

．．．クウェートの掠奪をやめさせるために武力を行使することは『道徳』に反すると批判する人々がいるかも知れない。しかし、平和的、外交的な努力が無にされたいま、武力を行使することこそが『道徳』なのである．．．」（1月28日）

「アメリカは神の下に設立された国家である。当初から現在にいたるまで、我々は、神の力、神の導きに身をゆだねてきた。このことは決して忘れてはいけない重要なことである．．．。この国で神への祈りを捧げずして大統領の職に就くことは、不可能である。アメリカという国は神の下僕である．．．」（1月31日）

こうした宗教的な発言において、ブッシュ大統領が再三にわたって引用したのが、

キリスト教的「聖戦」の原理である。

これは、西暦5世紀、そもそもイスラム教徒から聖地エルサレムを守るために組織された十字軍のため、「なぜ戦わなければならないか」を理論づけようと打ち立てられたものである。奇しくも同じ原理が1500年近くを経て、同じイスラム教徒との戦いに際して再びほこりを払って登場してきたのである。この原理、一言でいえば、「悪事を働くものに、罰を与えるためには、剣を持ち出してもかまわない」というものだ。世界史の各所に顔を出す、「イザとなれば戦いも辞さない」キリスト教の血なまぐさい側面は、すべてこの原理から発しているわけだ。

さらに、一般には政治的には中立と見なされているローマ法王庁が、今回のアメリカのイラクとの開戦にあたって、一役買っていた。イラクのクウェート侵攻に対してアメリカは武力で対抗すべきか、世界に賛否両論の議論が渦巻いていた矢先、ローマ法王ヨハネ・パウロ2世が、ブッシュ大統領宛てに一通の書簡を出していたのである。

ホワイトハウスに問い合わせたところ、「個人的で、非公開性の高いものなので内容をお教えすることはできない」との返事だった。その後、『USニュース&ワールドリポート』誌(1991年2月4日付)が報じたところによると、ブッシュ大統領は、開戦一週間前、6人の親しい友人たちに会い、開戦が道徳的に正しいということを説得。その席で、ローマ法王からの次のような書簡を読み上げたという。「(ローマ法王としては)世界が平和であることを祈るが、もし戦争が始まってしまったら、すばやく、数少ない死者で、アメリカが勝利することを希望する」

## 大統領を支える「テレビ伝道師」

ブッシュ大統領は、ホワイトハウスの執務室で一人、開戦の決断をするにあたって、何人かの宗教家と電話を通じて話し合い「決断」を前に神への祈りを共にしたとされている。大統領の決断を影で支え、精神的なバックアップをした宗教家の一人を取材することができた。

ロスアンゼルスから南に車で約2時間、オレンジ郡ガーデン・グローブは、豊かな緑に陽光が降り注ぐ典型的なカリフォルニアの郊外である。ハイウェイを降りるとすぐ太陽光線を乱反射する、一見、異様な建物が迫ってくる。上から下まで全面ガラス張りの巨大な教会。その名も「クリスタル・カセドラル」。教会内にはテレビ局も顔負けのスタジオと十台を越える大型の中継用カメラが装備されている。ここで執り行なわれる説教の一部始終が194のテレビ局を通じて全米に中継される仕組みである。

「テレビ伝道師」――。日本では聞き慣れないが、アメリカで一般的なテレビを通じて説教・伝道活動を行なう牧師のこと。週末に放映される番組は高い視聴率を上げている。あたかもアメリカの合理主義精神を体現したかのような存在だ。

「クリスタル・カセドラル」の主催者は、ロバート・シューラー師。今年65才。若かりしころ、スナック・バーの屋根の上から説教を続け、その魅力的な語り口で多数の信者を獲得。最新作『あなたを信じてくれる神を信ぜよ』をはじめ、これま

で30冊近くの著作がある。

ガラス張りの大きな扉を開いてカセドラルの中に入ると、ちょうど説教の真っ最中だった。思ったより、はるかに広い教会の中に、ひとつの空席もないほどにぎしりと一万人ほどの信者が詰めかけている。すごい熱気だ。黒衣を身にまとったシューラー師が信者たち、そしてテレビカメラの方向を交互に見つめながら、低音の、しかし、よく通る声で語りかけている。

「みなさん、戦争の勝利のために、兵士たちのために、わが愛する偉大な国アメリカのために祈りを捧げるのです！」

シューラー師は大きく息を吸い込むと、胸を張り、ゼスチャーを交えてこう続ける。「手のひらを高く掲げ、神の力を授かり、もう一方の手を、憎むべき人物に向けてのです。神の力でその人物を撃ち殺すのです！さあ、みなさん、ご一緒にどうぞ。指差す相手は、につくきサダム・フセイン。我々は、彼を愛せません」

教会の建物の最上階にあるシューラー師の部屋は3方は大きな窓になっており、茶系統の屋根の多い街並みが見渡せる格好になっている。遠く、淡い青色の海、赤茶けた山岳がかすんでいる。私たちのインタビューにゼスチャーを交えながら熱心に答えるシューラー師の背後で、これまた透明なガラスでできている十字架の置物が時折キラリと光る。

「大統領といえども、決断をする際には、強烈なプレッシャーを受けるのです。心の中に確固とした信念がないと決断はできません。その信念を形づくるのが、神なのです。今回、『開戦』という重大な決断を行なったブッシュ大統領も、自らの信念を固めてくれた神に感謝したはずです。．．．。湾岸戦争は、我々アメリカ人にとって『聖戦』でした。ナイフを持った男が妻や子供を殺そうとしたら、この男を殺すことで家族を守らねばなりません。この際、人を殺す権利があるかどうかは問題ではなく、誰の命を長らえさせるか、が問題なのです。一人の人間を殺すことで多くの命を救うことができる。キリスト教徒は、信念のためには、命を賭け、死ぬことさえできるのです。アメリカは建国以来200年、この原理に裏付けられてきました。危機に見舞われてきたとき、神に祈りを捧げ、神の力によって、正しい選択をすることができるのです。．．．。政治家と宗教家は、国をより良き方向に導くという同一の目的を持っています。共に協力し合ってゆくべきです」

---

☞ 「米ソの和平仕掛け人」、「世界の政治の仕掛け人」、「ソ連への自由化戦略を投じたもの」がバチカンだとすれば、この最後の10年に世界はどのような予測しない激変を経験するだろうか？ そして忘れてはならない。バブル経済の上に乗った繁栄に浮かれている日本も激動の嵐に巻き込まれることはないとは誰が言えよう。

教会への証 第三巻 p266

主の働きの精神と、魂の救いを心掛けている真の神の民は、罪をそのありのままのすがたではつきり見るようになる。彼らは、いつも神の民がたやすく陥る罪を忠実に、はつきり取り扱う側に立つ。特に教会のためになされる最後の働きにおいて、又、神の御座の前で過ちなく立つ十四万四千人の印される時に、彼らは神の民と自称する者たちの過ちを最も深く感じるのである。これは、その手に各々殺す武器を持っている者で表わされている例えで、預言者は最後の働きを非常にはつきりと示している。そのうちの一人は亜麻布を着、その腰に物を書く墨つぼをつけていた。主は「彼に言われた、『町の中、エルサレムの中をめぐり、その中で行なわれている憎むべきことに対して嘆き悲しむ人々の類にしるしをつけよ。』」エゼキエル書9：4

このような時に、誰が神の勧告に従って立つであろうか？神の民と自称する者たちの間にある間違いを実際に言い訳するものだろうか？けげにはしなくとも、罪を認責する者に対して、心の中でつぶやくものだろうか？そういう者たちに対して反対して立ち、悪を行なう者たちに同情する者たちであろうか？決してそういう者たちではない。もし、彼らが悔い改めて、働きの重荷を負っている者たちを圧迫し、又、シオンの罪人の手を支持するサタンの働きを捨てなければ、彼らは、決して神の証人の印を受けることはできない。彼らは五人の殺す武器を持つ者で示されている悪人の滅亡と共に滅びるであろう。この点によく注意して欲しい。：聖霊の力によってもたらされる、真理の清い印、亜麻布を着た人による印を受ける者は、教会の中で「行なわれているすべての憎むべきことに対して嘆き悲しむ」人々である。彼らの純潔、又、神の誉れと栄えに対する愛が、罪の恐ろしさをはつきり見せ、苦悶のうちに嘆き悲しませるのであると表現されている。どうかエゼキエル書9章を読んでいただきたい。

★ この印刷物は信徒によるもので、皆様の祈りと自由献金によって続けられています。一部350円ほどの献金をお願いできれば幸いです。尚、資料代や献金などの送金には郵便振替をご利用ください。振替口座番号は下記です。

鹿児島 8-12121 サンライズ ミニストリー  
住所 〒905-14  
沖縄県国頭郡今帰仁村字今泊1471番地  
サンライズ ミニストリー内 アンカー係  
☎ 0980-56-2783  
FAX 0980-56-5083

編集人：金城重博

「わたしは、多くの人々が集まっている神殿を見ている夢を見た。終末のときに、その神殿に逃れた人々だけが救われるのであった。外に残っているものは皆、永遠に失われるのであった。外で自分勝手な道を進んでいた群衆は、神殿の中に入る人々をあざけり、軽蔑し、この安全計画は巧みな欺瞞であって、実際には避けなければならない危険などは何もないのだ、と彼らに言った。彼らは、幾人かの人々を捕らえて、彼らが神殿内に急いで入ろうとするのを妨げることさえした。

「わたしは、笑われあざけられるのを恐れて、群衆が散らばってしまうまで待つか、または、彼らに気づかれずに中に入ることができるまで待つのが良いと考えた。しかし、群衆は減るところか、増える一方なので、わたしはおそくなつてはいけないと思い、急いで家を後にして群衆の中を進んで行った。わたしは、神殿に入ることばかり考えていて、わたしの周りの群衆のことには、少しも気づかなかつた。建物の中に入ってみると、神殿は巨大な一つの柱に支えられていて、これに、全身傷つき、血が流れている小羊が縛りつけられているのを、わたしは見た。そこにいたすべての人々は、この小羊が、われわれのために裂かれ傷ついたことを知っているように思われた。神殿に入った人々は皆、その前に来て罪を告白しなければならなかつた。

「小羊のすぐ前のところに、高くなつた席があつて、それに、非常に幸福そうな一段の人々が座っていた。天の光が、彼らの顔を照らしているように思われた。そして、彼らは神を賛美し、天使の音楽かと思われるような喜ばしい感謝の歌とを歌っていた。小羊の前で罪を告白し、許された人々であつた。そして、今、何かの喜ばしい出来事を楽しく待っているのであつた。

「建物の中に入った後でも、わたしは恐れを感じ、このようは人々の前で、面目を失うのは恥ずかしいことだと思つた。しかし、わたしは、前に押し出されているように感じ、小羊に対面するために柱のまわりをゆっくりと進んでいた。すると、ラッパが鳴って、神殿は揺れ動き、大きな勝利の叫びが集まつた聖徒たちからあがつた。恐るべき光が建物を照らしたと思うと、あたり一面は真っ暗になつた。幸福な人々は、その輝きと共にみな消え去り、わたし一人が、夜の恐ろしい静寂の中に取り残された」初文161～163